

復

活

(五幕)

(トルストイ原作、アンリ・パタイユ脚色)

トルストイの小説『復活』(Resurrection)は千八百九十九年の作で、晩年の作者の面を代表する名篇である。是れが小説として、藝術として、乃至思想教義の宣傳として、社會組織の批評としての研究は、既に種々の人によつてなされた所であるが、その贊否いづれに拘らず、十九世紀末の最も重大な一著作として、世界を動かしたものであることは言ふを俟たない。

小説と劇とは固より方式を異にした藝術であるから、小説の寫すところを其のまゝ劇になることは困難である。たゞ如何なる程度まで原作の感じ、思想、人物、事件を劇中に生かし得るかといふだけが比較の興味である。従つて小説から脚色した劇の善悪が、原作小説の責任でないことは言ふまでもない。

小説『復活』を劇に脚色したものは、フランスのアンリ・パタイユ(Henry Bataille)の作がある。私がそれを見たのは千八百九十三年にピアボム・ツリー(Berthom Tree)がロンドンの「陛下座」で其の英譯を演じたときである。

今回の此の脚本はトルストイの原作小説とパタイユの脚本とそれに小改竄を加へたツリーの所演と三つを本にして更に「藝術座」第三回の上演臺本に適するやう、再脚色を施したもので、大正三年三月二十六日から六日間帝國劇場で演ずる。重要な役割の定まつてゐるは松井須磨子のカチューシャである。

尙小説『復活』の翻譯には英譯にロイス・モード(Louis Maude)のがあり、邦譯に内田魯庵氏のがある。

人物

ネフリユドフ(公爵)
シモンソン(國事犯囚)
チホン(老僕)
フアナリー(辯護士)

陪審長、陪審の商人、同教師、同大

佐、同職工組合長、他七人

病院の助手、同醫長

看守、押丁、小使、召使、護送兵等

男囚徒若干人

マ스로ワ(カチューシャ) (女囚)

フョードン(女囚)

ミシー(コルチャイギン侯爵家の令嬢)

マリア(國事犯の女囚)

一の叔母、二の叔母(ネフリユドフの)

老女中、若女中

老女囚、紳名大ロシア、紳名美人、無言の女等の女囚徒

時代

現時

場所

ロシアの田舎、モスクワ及びペンペリヤ

第一幕

第一場

モスクワ市の貴族ネフリウドフの家の寢室の一部、中央下手に寄つて立派な寢臺、正面上手にカーテンを引いた窓、上手横に扉、又寢臺の前には見事な小卓、其の上の火の點つた銀の蠟燭皿が載せてある。夜更けの心持。季節は四月。

ネフリウドフは上等の眞白なリンネルの寝衣を着て寢臺の上すわり伸べた。兩脚に羽蒲團をかけたまま、寢がけの紙巻煙草を吸ひながら蠟燭の火で一枚の寫眞を見てゐる。

ネフリウドフ (生あくびをして) あゝあ。コルチャーギンの夜會もいゝが、あゝ、どうも立てつづけにやられちゃ、たまらない、第一體がつじかないからなあ。しかし、ミシーは憎くないね。初めの内あんまり持ちかけやうがしつこいので氣味が悪かつたが、今ちや向うの仕うちも自然になるし、こつちもだんだ

んなじんで来たせぬか、いゝ心持で、お相手が出来るやうになつた。ふゝ、ミシー！ ミシー！ (寫眞にちよつと接吻して) 私がお前さんにきまつた返事をしないのは、お前さんが嫌ひだからぢやないのだよ。私には或る主のある女で、少々困つたのがあるのだ。私の地面内の田舎にゐるのだが、どうしても女の力で切れて呉れない。併しこの頃はまた若い士官に阿惚れして浮れてゐるといふから、今に片づくだらう。田舎女は思ひ切りの悪いくせに浮氣だからね、全くいやになるよ。田舎女と言や、あゝ、もう十年からになるが、カチューシャはどうしたらう？ 長い昔の事だね。あれは復活祭の晩だつた。さう、あれと二人向ひあつて窓に腰をかけてゐると、外は一面の霧のこめた月夜だつた。下の川からは水の割れる音が聞えて、遠くの方から復活祭の歌が聞える。あの時カチューシャが手拍子を取つて私も一緒に中音で歌を歌つたが、あゝあゝ、もうみんな遠い昔の事だ。明日はまたコルチャーギンへ行つてミシーのお供で美術館へ行くのかな。あゝあゝ、(また生あくび) 疲れちやつた！ コルチャーギン、田舎貴族の細君の浮氣者、カチューシャ、

復活祭の歌、復活祭の歌、あゝあゝ、(寢て枕元の蠟燭皿を取り蠟燭の火を吹き消す、舞臺暗くなる、ダーク、カチューシャ)

第二場

舞臺の眞暗な中から復活の讚美歌が遠く聞えて来る。其うちにバツと明るくなると田舎の別荘の一室に變つてゐる。正面上手に作りつけて寢床、カーテンがしぼつてゐる。下手は大きな窓、そこから月夜に遠く雪の野の景色が見える。三月の復活祭の頭で薄い霧が一面にこめてゐる。時々向うの川の氷の破れる音が聞える。室の下手と上手に扉。

老女中 若い女中 (枕元の置時計を見て) もう十分で十二時ですよ。

老女中 ぢや、もう十分たつとキリスト様が蘇らつしやるんだね——今夜は何ていふ氣候だらう？ 明るくつて、それで暖い霧が立つてゐて、まるで夏の晩のやうだ。接骨木

の花が匂つてゐること!

若い女中 あなたももうおやすみなすつちやどう? あとは私とチホン爺さんとで十分ですよ。

老女中 いゝえ、私はお歸りまで待つてゐて復活祭の接吻をしなくちやならないのだよ。瓶の水だの、タウエルだの石鹸だのをよく見とお置きよ。

(遠くで此時鐘が鳴る)

若い女中 復活祭の鐘が鳴り出した!

老女中 「キリストは蘇り給へり」

若い女中 「キリストは蘇り給へり」

(二人一寸抱き合ふ)

若い女中 若旦那はまたすぐお立ちだつていふぢやありませんか?

老女中 あゝ、さうとも、明日の朝は是非立つていらつしやなくちやならないのさ。トル

コへ戦争においでなさるのだよ。その前にちよつとソニヤ叔母さまとラウラ叔母さまに會ひにいらつしやつたのだから、どんな事があつても、それより長く御逗留は出来ないのだ。

それやさうと、カチューシャは何うしたえ? 若い女中 あれは真様方と一緒にの馬車で教會のお祭に行つたのですよ。白い服を着て赤い

簪をさして、めかしこんでさ。

老女中 真様方と一緒にの馬車で? へん、牛乳屋の私生兒が馬車に乗つてかい! そして、若旦那さまも御一緒にの馬車かえ?

若い女中 いゝえ、若旦那はお着きになるとすぐ、服もかへないで馬でいらつしやいました。

老女中 此前いらつしやつた時よく運動にお乗り遊ばしたあの年とつた方の馬がお好きなのだよ。

老女中 此前たつて、つい一昨年いらつしやつたのだが、あの時はまだ大學生の帽子を被つて、書生々々していらつしやつたが、今度見ると立派におなんなすつた事ねえ。髯なんかは

やしてほんとに立派におなんなすつたよ。

若い女中 (窓の方へ行き) 御覽なさい、もうみんな教會から歸ると見えて、提灯が見え出しましたこと! あの一番早い提灯が二つ、屹度家の方ですよ。

老女中 ちやお迎に出なくちや... (二人出て行く、戸の外で)

一の叔母の聲 さあ、お還入り。

二の叔母の聲 氣をつけておあるきよ。

ネフリユドフの聲 はあ、大丈夫です、よくおほえてゐますから。

(ネフリユドフと二人の叔母入り来る)

一の叔母 之がお前さんのお部屋ですよ。すつかり元のとほりですよ。

ネフリユドフ 全く元の通りですね。

二の叔母 あの寝床も、テーブルも、それから神さまのみ像も、みんなそつり元のまゝだらう?

老女中 (勿體らしく進みよつて) 「キリストは蘇り給へり」

ネフリユドフ (微笑して) さう、さう。私はお前をおほえてゐるよ。

一の叔母 お前、笑つてゐて、何もしないね。軍隊へ這入つてから、神さまの事を忘れたのぢやあるまいね? 復活祭にはお前、上下の隔てなくみんなが抱き合つて接吻するものぢやないか。此の邊ではまだみんな其尊い習慣を守つてゐますよ。

ネフリユドフ さうでしたつたけね。なに、忘れやしないのですがね、ついその、あちらにゐるとあんまりやらないのですからね。(室内を見まはして心ありげに) 全く何も變つてゐませんね。一昨年のまゝですな。それから叔母さんたちまでまだ白髪一本も見えませぬえ!

二の叔母 變つたのはお前ですよ。本當にこ

んな立派な軍人になつて、ちよつと見分けがつかない程ですよ。何よりも其髯が立派だねえ。

ネフリユドフ また髯ですか？（笑つて）私がこゝへ來てから一等よく聞いたのはキリスト様の復活と髯が生えたといふことです。近衛は中尉になるとこいつを生やすのが規則ですからね、髯は即ち位なのです。

一の叔母（寢床を見て）お前、蒲團を二枚かけたら、寒くはなからうね。

二の叔母 湯たんぼでも入れてあげようか！

ネフリユドフ いゝえ、叔母さま、決してそんな御心配には及びません。暖ですよ。それよりかもうよつほど遅いやうですから、あなた方はどうかおやすみ下さい、さ、早くおやすみ下さい、風邪でもおひきになるといけません。

（扉を叩く音がする）

一の叔母 百姓家がお前に復活祭の接吻をしに來たのですよ。（ネフリユドフたじろぐ）尊い習慣だから、してやつて下さいよ。

ネフリユドフ おはひり。

（一群の農民、帽子を手を持ち這入つて來る。先づ神の前に一禮してからネフリユ

ドフに辭儀をする）

農民甲（進み出て）若旦那さま、御無事でお着きなさいましておめでたうございます。

ネフリユドフ やあ、今晚は。お前の家はたしか川向うだつたね。今晚は、お爺さん。私はいつもお前がたの事を思ひ出してゐたよ。今晚は。君にはたしか子供の折よく驢馬に乗せて貰つたつね。やあ、今晚は、今晚は、今晚は、今晚は。

農民甲 若旦那さま、私等みなして復活祭の卵を差上げに參りましたが、斯うして鬱金色に染めた卵でございます、神さまの思召でございますから、どうぞ受けさつしやつて下さいまし。

ネフリユドフ ありがたう、見事な色をした卵だね！ さ、お前から手初めに接吻して呉れ。

農民甲（袖で口を拭ひながら）若旦那さま、待たつしやつて下さい。斯うして口を綺麗に拭いて置きますから……キリストは蘇り給へり（ネフリユドフの顔に三度接吻する）

ネフリユドフ それからお爺さん。それから。

（農民交るゝ卵を捧げ、口を拭ひ、「キリストは蘇りたまへり」と言つて接吻する）

一の叔母 さ、もう、お前は疲れたでせうからおやすみ。

ネフリユドフ はあ、疲れましたから、それは明日。ちや皆さん、卵をありがたう。（農民出て行く、それを戸口まで見送つてあとをしめ）あの大きな口で三度もつゞげさまに接吻された時は、觀念はしてゐてもちよつと驚きました。硬い髯で顔中引つかれるかと思ひました。（大股に室内をあるきながら）此の机でしたね、私が一昨年卒業論文を書いたのは。あの時の紫のインキのしみがまだ残つてゐますよ。

二の叔母 さうとも、お前、そつくり昔のまゝにしてあるよ。それはさうとお前は明日立つて戦争へ行くといふことだが、大丈夫だらうかねえ？

ネフリユドフ 大丈夫ですとも、六ヶ月たつとまた休暇を取つてやつて來ますよ。そして昔のやうにいろんな面白い本でも讀んであげませう。

一の叔母 どうかねえ。では今夜は早くおやすみ、寢床の支度はいゝかしら（下手の戸口の所へ行つて呼ぶ）カチューシャ、カチューシャ！ ちよつとおいで。

カチューシャの聲 はい〜。

一の叔母 (戸の外へ向つて) あのね、私の部屋にある上等の石鹸と、それから新しいタオルとを若旦那さまに持つて来ておあげ。それから、チホンに水差を持つておいでつてね。カチューシャの聲 はい、かしこまりました。

(ネフリウドフはカチューシャの聲に聞耳を立てる)

ネフリウドフ さあ、叔母さん、これでいよいよ今夜はお別れにさせよう。どうぞおやすみなすつて下さい。荷物ですか？ あれは今にチホンが来たら解いて貰ひますから御心配には及びません。どうぞ早くおやすみ下さい、私もすぐ寝ますから。(二人の叔母の手に接吻する)

二の叔母 ではおやすみ。よく暖かにして、風邪をひかないやうにおし。おやすみ、おやすみ。(顔と兩頬とに三度接吻して上手口から出て行く)

一の叔母 明日の朝は乳入りのコーヒーにして置きますよ。ではおやすみ、おやすみ。(之も三度接吻して上手口から出て行く)

ネフリウドフ (椅子に腰をかがぐつたりとなつて) あゝ、これでやつと楽になつた、年寄

りといふものは何うしてあゝ諄いかなあ！カチューシャは何うしたらう？ 早く會つて話して見たいものだ。(扉の方を見るとちやうど叩く音がする) おゝ、カチューシャか？ おはひり！ (戸口まで行つて戸をあけると、老僕のチホンが水差を持つて入り来る) なんだ！ お前か？

チホン はい、若旦那さま、おめでたうございます。が、あなたさまは、さぞお疲れさまでいらつしやいませう。(水差を盆に載せたまゝ卓の上に置いて頻りに口を拭ふのを見て) ネフリウドフ さあ、復活祭の接吻をして呉れ。(チホン、「キリストは蘇り給へり」といつて顔に接吻する) 私も戦地へ行く前に斯うして皆と會へて實に愉快だよ。

チホン わたくし共も、まことにありがたい仕合せでございます。斯うして立派におなり遊ばした若旦那さまにお目にかゝるのでございますもの、長年御奉公の仕甲斐があつたと申すものでございます。

ネフリウドフ こつちではみんな變りはないか？

チホン (行李を解きながら) へえ、神様の御蔭で此の爺まで、斯んなにびん〜して居

ります。

ネフリウドフ それからお前の子供も孫も？

チホン はい、みんな息災でございます。それからあの好きなカメもまた丈夫でございます。すし：たゞあの年取つた馬の一つの方、それ、御存じでございますか？ 今夜お乘りになつたでない方が、去年赤痢に取りつかれて死にましてございます、かはいさうな事をいたしました。

ネフリウドフ さうか？ それはかはいさうだなあ。あゝ、その劍は出して置いて呉れ。それからそのリンネルと化粧箱だけ出して置いて呉れ、はい。あゝ、その紙入れをお見せ。其の中にはな、一杯、女の手紙だの寫眞だのが這入つてゐるのだよ。

チホン はゝあ、若旦那さま、いけません、いけません。成程、これは可なり重うございますな。

ネフリウドフ はゝ、お前等にはさういふ世の中は分らないだらう？ な、爺や。

チホン 若旦那さまは、きつい色男におんななさいましたな、へゝへゝ。

ネフリウドフ 馬鹿を言へ。これが世間並なのだ。みんなやるから俺もやるのだ。此の中

には或大使館附の武官の細君から来た手紙があるが、私は其女のために決闘までしたよ。

チホン 其女のために決闘をなさいましたつて？へえ！若旦那さまもえらい、色事師におなんなさいましたな。

ネフリユドフ それから此の包と紐とは或る女優が送つて呉れたものだ。

チホン 若旦那さまはまあ、お遊ばし遊ばししたなあ！つい一昨年までは、まだほんたうの書生さまで、よく理窟ばかり言つていらつしやいましたか？何とかそれ、イギリスの學者でスベンサーとかおつしやいまして、今此の御先祖からの大地面も財産も小作人どもに、たゞ呉れてやるやうな事をおつしやつていらつしやつたが。……まあ、あれよりは今の方がよつほどよろしうございます。

若旦那さまは、女の人二人や三人おこしらへ遊ばすのは當り前でございます。いや、よく立派な旦那さまにおなりなさいました。斯んな風に軍服を召して髭をはやして……(ネフリユドフの顔を見ると頻りに一枚の寫眞を見ておる)若旦那さま、それも女衆の寫眞でございますか？

ネフリユドフ カチューシーヤ！カチューシーヤ！チホン(不思議げに覗いて)……あ、一昨年の寫眞でございますな。私も寫つて居ります。

真中が若旦那さまで、右が大叔母さま、左がカチューシーヤ、其の前に私が坐つてをまつて、カメも寫つて居ります。カチューシーヤは全くいゝ娘になりましたな、若旦那さま。

ネフリユドフ あゝ、いゝ娘になつたが、今夜はどうしたのか、さつぱりやつて来ないね。

チホン まだ御挨拶にも出せんか？はゝあ、屹度恥かしがつて居るのでございますよ。御主人さまにそんな事があるものか。今に呼んでまゐります。

ネフリユドフ いや、わざ、呼んで来なかつてもいゝから、爺やはお寝み。迎いからな。もう用はないから。

チホン はい、さやうでございますか？ではもう御用がございませんなら、これでお先へ失禮をいたします。(また口を拭いておるのを見てネフリユドフ顔を出すと「キリストは蘇りたまへり」と言つて三度接吻して出て行く)

(ネフリユドフ窓の前へ行き外の景色を見てゐる。戸を叩く音)

ネフリユドフ どなた？

カチューシーヤの聲 カチューシーヤ。

ネフリユドフ カチューシーヤ、さあおはひり。さつきから随分待つてゐたよ。

(カチューシーヤ、祭の白の晴着に赤いリボンの簪をさし、タウエルと石鹼と花束とを持つて這入つて来る)

カチューシーヤ 御免なさいな。花を揃へてゐたものですから、少し遅くなりましてすみません。此のタウエルとね、それから此の匂ひ入りの石鹼は、特別に叔母さまからあなたに差上げるのでございますつて。それから此の花は……つまらない花しか集まらないのですけれど……でも少しは香ひがございすわ。

ネフリユドフ (石鹼と花とを両手に持ち交る交る嗅いで見て) ちや、此の花はお前が呉れたのだね。どうも、ありがたう。どうも、ありがたう。さあ、まあ、こゝへ来ておかけ。

カチューシーヤ (恥ぢらふやうに横を向いて) もう遅うございますから、私、行きますわ、おやすみなさい。

ネフリユドフ いけない。来るとすぐ行かないで、少しの間でいゝから話して行つてお呉れ、私なんだかお前に行かれると淋しくて

いけないから。それ、あの枕がまだ袋には
まつてゐないよ。あれを拵へて置いて呉れな
くちや。

カチューシヤ あら、まだでしたか？ いけない
わね。私、うまく行きますかしら。

(寢臺の傍へ行き枕を枕袋に入れよう
とする。ネフリユドフ、つかくくと寄つ
て後から其頸に接吻する)

何をなさいますよ？ (振り放して) ……あな
た、いけないぢやありませんか？ 放して下
さいよ、さ。後生ですら放して下さいよ！
いゝえ、よかありません！ よかありませ
ん！…(泣く)

ネフリユドフ (手を放して) 泣いぢやいけな
い、泣いぢやいけない。私が悪かつたから堪
忍してお呉れ。お前はそんなに私を嫌ひだつ
たのか？ 私はもつと私を愛してゐて呉れる
と思ひ込んでやつたのだよ。私が戦地へ行く
前にこゝまで来たのはお前の顔が一日見
たかつた許りでだよ。今日私は初めてこゝの
家へ着いた時も、一番にお前が玄關まで出迎
へて呉れるかしらと、そればかり楽しみに
して来て見ると、お前の姿はどこにも見えな
いぢやないか？ もう此の家には居ないのだ

と思つたら胸が一杯になつて了つた。其のう
ちにお前の聲が廊下の方で聞えたものだから
私の心臓は一時に動悸がしはじめ、急に家
の中が明るくなつたやうに思はれたよ。私は
それほどに思つてゐるに、お前は少しも私の
事を思つて呉れないのだね！

カチューシヤ それは私だつて思つちやゐます
けれど、だしぬけに今のやうな事をなさるの
ですもの、びつくりしますわ。私だつて、あ
なたがこゝへお着きになつたと思ふと、ひど
く動悸がし出して、顔が火のやうにほてつて
来ました。そのために出ることも出来なかつ
たのですよ。(うつむく)

ネフリユドフ 分つた。だから私たちは、
斯うして誰も居ない所でほんたうの話をし
たいぢやないか？…恐いことはないから、あ
そこへ腰かけてお呉れ。さ、お坐り、私決し
て亂暴な事はしないから。(背に手をかけて
椅子に坐らせる) 恐くないよ。

カチューシヤ もう恐ありませんわ。
ネフリユドフ ね、さうだらう？ で、さつき
教會で、儀式のあつた時は、お前、少しも私の
方を見なかつたね。なぜさ？
カチューシヤ でも、さまざまが悪かつたのです

もの。

ネフリユドフ あの時、お前は全く綺麗だつ
たよ。一方には煙臺の燭燭が赤く燃えてゐ
て、戸の傍には銀色の袈裟をかけた坊さんが
香爐を手に載せて立つてゐる、その真中程に
眞白の服を着て眞黒い髪をしてお前が坐つて
ゐて、ほんたうに美しかつたよ。

カチューシヤ あなたがそんなに見て下さつた
のなら、半分諷にしても嬉しうございますわ。
ネフリユドフ 諷なことがあるものか！ さう
さう、此寫眞を御覽、お前、あゝ、一昨年の祭
の時の事を覚えてゐるか？

カチューシヤ え、おぼえてゐます。
ネフリユドフ 二人一緒に駈けくらをしたね。
私がお前の手を引いて、一、二、三で駈け出
すと、お前の糊のついた下着がガハハ音か
したつて。

カチューシヤ あらいやだ！ そんな事をおぼ
えていらして！ だけどあなたはすぐ駈け越
してお了ひなさいましたわね。

ネフリユドフ あゝ。それからどうしたつて！
カチューシヤ それから私、あの連翹の茂みの
後へ行つて、駈けることを止めてゐると、
ネフリユドフ 私がそこへ行かうと思つて、其

の方へ駆け出すはずみに茨の生えてる溝へ落つこちて了つて、

カチューシヤ えゝ、あの時は私、どうしようかと思ひましたわ。

ネフリユドフ やつとお前の手につかまつて這ひ上つたが、足はぶづ濡れで手には引つ掻き傷が出来て、みじめな様だつたね。

カチューシヤ でも、たうとう連翹の木の下で二人一緒になりましたわね。

ネフリユドフ あゝ、あの連翹の木の蔭！ お前、あれを忘れてる。

カチューシヤ いゝえ、私、あなたの傍へよつて、何の氣なしにあなたの服についてる茨を取つてみると、あなたは何時か私の上にしたのかゝつていらつしやつて私の手をきよと掴んで接吻なすつたわ。

ネフリユドフ するとお前は驚いて二日間駆け出して、白い花の散りかゝつた連翹の杖を折つて真赤になつた顔を煽いでゐたね。

カチューシヤ だつてひどいのですもの。でも、其爲めに、あなたを怨みなんかしませんでしたわ。

ネフリユドフ あれから私はお前が忘れられなくなつたのだよ。(腰を抱きながら急に立ち

上り) お前、何も聞えないか？ あの音は何だらう？

カチューシヤ (耳を澄して) ほゝ、あれは女中頭のお婆さんが軀をかいてるのですよ。

ネフリユドフ (笑つて) なんだい、女中頭のお婆だつて？ だが鐘の音か何か聞えるね。(窓へ行つて明け放す) あゝ、好い夜だ！ 潤んで暖かくて... さあ、こゝへ、私の傍へおいで。(二人向ひあつて窓に腰をかける) 春になつたね！ あの月の真下のところを割れ目の見えるのは、川の氷だらう？ あの音は氷の割れる音だね。

カチューシヤ 春になつたのですね！ お聞きなさいよ、もう一番鶏が鳴いてゐます... 氷の砕ける音はあの森の後の川から聞えて來るのですよ。

ネフリユドフ 實にたまらなくいゝ景色ぢやないか？ 斯うしてお前の手を取つて、此の景色の中をいつまでもゝあるいてゐたい！

おやゝ、田圃にはまだ人が大勢ゐるやうだね？

カチューシヤ あれは隣村の人たちが復活祭の火を燃やしに來たのでせう。

ネフリユドフ その前でみんな歌を歌つてるやうだね？

カチューシヤ そしておしまひにお祈りを言ふとそれが一年経たない内になふのだからでございませう。

ネフリユドフ お前も一つ歌をお歌ひ。そしてお祈りをして願をかけようね。

カチューシヤ でも、私、できないのですもの。それに叔母さまのお目をさますと大變ですわ。

ネフリユドフ 大丈夫、低い聲で歌つたらいいぢやないか。お前の名を入れた歌をお歌ひ。

カチューシヤ さうねえ、ぢや、歌ひませうか？... (ちよつと考へて軽く手を拍ち)

カチューシヤ かけは、いゝや別れのつらきせめて淡雪とけぬ間と、神にねがひをかけましょか

ネフリユドフ もう一度、私も歌ふよ。(二人して手を拍ち低く歌ふ)

さあ、歌を歌へば、もう一つ、復活祭の儀式があるだらう？ 私とお前と肩に接吻すること、今日はみんな平等なのだから。

カチューシヤ いゝえ、それは父親ばかりです

よ、他人は額に接吻するのです。

ネフリユドフ　ぢや、この他人は額をお出し。

カチューシヤ　はい。

(すなほに額を出す、それを両手に挟んだまま接吻せんとして)

ネフリユドフ　でもこんなかはいらしい額では、接吻する場所がないよ。だから唇に

でもい、だらう？

カチューシヤ　いけない。額だけ。

(避けんとするのを制してちつと眼を見つめ口をつける、女それを唇に受ける。

しばらくして目のさめたやうに)

あゝ。私どうしたのでせう？　いけない、後生ですら放して下さい。

ネフリユドフ　私はもうお前と此まゝには別れられないよ。

カチューシヤ　(涙聲で)でも明日は戦地へお立ちなされるぢやありませんか。またいつお日にか、いれるか分らないものを、今夜きりそんな事をなすつて、残酷ですわ。あゝ、私どうしたらいいでせう？　私、もう行きますわ、いゝえ、行かなくちやならない、行かなくちやならない。

ネフリユドフ　(しばらく抱きとめようと)

いて)そんなに言ふならおいで!

(女を手放して立つ。女はまた男の胸に頭をあて啜り泣きながら)

カチューシヤ　わだ、やつぱり行かれない、行かれない。(ひとと男にすがる、其時再びダイク、チェーンジ)

第三場

舞臺段々に明るくなると、第一場の場面に戻る。早朝の光が窓かけを透して射し入つて来る。

ネフリユドフは寢臺の上に眠つてゐる。下手の扉を叩く音に眼をさます。

ネフリユドフ　あゝ、古い夢を見たな。(月の音に耳を向け)誰れだ?

召使　コルチャーギン様から急のお使でございます。お手紙がこゝにごさいます。

(寝衣のまゝ起き出して戸口へ行つて手紙を受取り、寢臺に腰をかけてそれを讀む)

ネフリユドフ「あなたさま　昨夜は例の輕受合にて今日美術館へ御同道下され候やうにお言葉　楽しみにいたし居り候へど、よくく考へ候へば今日あなたさまは、陪審官として

裁判所へお出でなさる由のいつぞやのお話、萬一其方をお忘れ遊ばしては大へんと存じさつそく文してお知らせ申上候、其代り裁判所の方すみ次第私宅へお越し下されたく、御用すみの時刻を見はからひ、私、馬車にて裁判所までお迎ひにまゐり申候、あとはお目もじの上、ミシーより「讀み了つて手紙をテーブルの上に投げ出し」さう、今日は裁判所へ行くのだつたな。馬鹿々々しい仕事もあつたものだ。どれ、もう起きよう。(ベルを押す)

第二幕

モスクワ　巡廻裁判所内審議室、中央に一脚の大テーブル、周圍に椅子、上手に長椅子、正面中程及び左右の横手に扉。

小使甲乙テーブルの上を整理してゐる。

小使甲　今日の裁判は何の事件だらう!

小使乙　それ、あの、女郎の毒殺事件よ。知らないのかい!

小使甲　知らないよ。

小使乙 あんなに新聞で書き立ててゐるぢやないか！ マスロワといふ女が客の商人を毒殺した事件さ。

小使甲 さうかい。

(此時トヤ〜と音して、正面の戸口からネフリユドフを初め十二人の陪審官等が這入つて来る。ネフリユドフは顔色が蒼ざめて今にも卒倒しさうな様子で、他のものに扶けられて入り来り、長椅子に倚りかゝる。他の人々は退屈したといふ風に體を仰したり、息をついたり、煙草を吹かしたり、そこらを歩き廻つたりしてゐる。小使出て行く)

陪審の教師 ネフリユドフ公爵、一たいどうなすつたのです？ カチューシヤとおつしやいましたね！

陪審の商人 いや、誰れでもあゝなると、氣絶したくなりませぬ。拙者なども少々まゐりました、第一、女が不便でさあ。あれを罪に落さうとは、検事もひどいや、人情が無いといふものだ。

陪審の退職大佐 では君？ この被告を無罪だと主張するのかね？
商人 無罪さ、勿論無罪さ。あれは大佐、竊盜

だの人殺しだのと、そんな大それた事の出来る女ぢやござせん。あの眼を見れば、分つてるぢやないか。

大佐 いや、大悪人といふものは、得てあゝいふ無邪氣な容貌をしてゐるものだ。君はいかんなよ。被告が女だと、すぐ同情して了ふからいかんよ。

商人 大佐、そいつはいけない、女だから同情するといふ法はない。少なくとも吾輩に取つてはだね、せめて、美人だから同情すると言つて貰ひたいね。マスロワは全く素敵な美人だ。ねえ、ネフリユドフ公爵、さうぢやござせんか？

陪審長 さあ諸君、どうか席について審議をお始め下さい。要するに問題は簡單です、本年二十七歳のカテリナ又はカチューシヤ・マスロワがシベリヤの商人スメルコフを、其のダイヤモンド入の指輪及び所持金を竊取する目的で毒殺した、共犯人の一老婆は拘引せられる日に死んで了つた、被告人マスロワは有罪なるか、無罪なるか、といふのであります。

教師 僕は、有罪ではあるが情狀酌量すべきものがあると考へます。

商人 いや、吾輩は無罪放免を主張します。あの女は決してそんな悪事を行ひ得るものでござせん、重なる共犯人といふのが死んだ以上、到底動かない證據は上りつこはござせん。罪の疑はしきは何とやら言ふ本文がごわすからな。吾輩は無罪放免を主張します。

大佐 これは怪しからん、他に二人までちゃんと共犯人が出てゐるではないか、君。彼等は既に竊盜をしたに違ひないと定まつて了つた。さうだとすると、若しマスロワが彼等と共に謀しなかつたら、彼等ホテルの傭人どもが金のありかを知らう筈がないではないか？

陪審長 それに被害者の鍵は現にマスロワが預つてゐたのですからな。

教師 それだけでは證據にはなりませんまい。鍵を預つたからといつてホテルの傭人どもが、何も他の合鍵を用ひないとは限りませんまい。

商人 ヒヤ〜。

教師 それから、金を竊んだといふが、此の女はその金を何所にも所持して居りません。境遇が境遇だから、そんな大金を盗んだつて、使ひ道がないのです。隠す場所も無いのです。

商人 ヒヤ〜。それが圖星だ。
大佐 併し指輪を持つてゐる。

教師 それはたしかに貫つたのだといふ證據が
あります。

商人 あの指輪はづぬけて大きいですねえ。被
害者の身體検査は何うとか言ひましたね、陪
審長？

陪審長 こゝに要點が筆記してあります。丈が
六尺五寸。

商人 ふうん、見事な男でげすな。

陪審長 年齢四十歳前後、全身悉く腫物を生
がんでゐる。髪の毛は栗毛で、さはるとすぐ
脱げ落ちる。眼珠は飛び出してゐて、角膜は
黒ずんで居り、鼻、耳、口から薄い鼠色のと
ろろした液が滲み出でゐる。

ネフリエドフ（長椅子から立ち上り）陪審長
私は今日或る重大な理由で、あの被告人の身
の上に關し、非常な感動を受け、それがため陪
審の席にも居られない程精神が興奮して、皆
さんの御厄介になつたのでありますが、マス
ロワが最後に泣き叫んで言つた一言は、神に
誓つて偽りでありません。此の事を眞に斷言
し得るものは恐らく私一人であらうと信じ
ますが、其の理由を、只今この席で述べるだけ
の決心がまだ私につきません。兎に角マスロ

ワは竊盜を働いたり、人を殺したりする女で
ないことは、先程のお説の通りです。現に犯
人はもう其罪を白状して死んだではありません
んか？ それ程の大罪を犯したものが、裁判
廷に立つて、マスロワのやうな態度でゐられ
るものでは決してありません。千百の證人
や證據物件よりも、このたゞ一つの心の證
が大事であります。私はこゝで天地神明に誓
つて、マスロワの辯明に偽りの無いことを繰
返して置きます。

陪審長 併しマスロワがコニヤツク酒に亞砒酸
を混じて其商人に飲ませたといふことを自
白して居ります。

大佐 そして亞砒酸は毒薬ですからな。それに
ついて自分の親戚に關する一つの例がありま
すから参考のためにお話しませう……

教師 いや、例には及びませんから、簡単に願
ひます。亞砒酸の毒藥たることは吾々もまた
認めて居りますが、マスロワは其商人を少
し眠らせる爲だといつて、老婆から渡された
のを、信じて飲ませたのです。ですから輕々
しくさういふ事を信じた過失の罪はあるかも知
知れないが、殺意は無かつたものと認めざる
を得ません。

大佐 そこがき、分らない所だよ、君。知り
ませんでした、殺すつもりはありませんでし
た、と犯人が言へば、君はすぐそれを信する
のかね？ そんな言ひぬけは犯罪人のきまり
ぢやないか？

ネフリエドフ 成るほど、それは言ひぬけかも
知れませんが、が、また眞實かも知れません。
どちらとも分らない時には、たゞ其の當人に
ついて、さういふ事をするものであるか無い
かを吾々が直覺で見とほす他はありません。
其の心の證が何よりも貴いのです。證據
などといふものは、たゞ物の外部だけしか照
す力はありません。

大佐 だから吾々は吾々の心の證で、有罪だ
と見とほしたのではありませんか！ 吾々の
方がよつほど筋道が立つて居る。

ネフリエドフ それを見とほすには、何よりも
其の當人を知つてゐなくちやなりません。マ
スロワの生立ちから經歷、彼れが今日のや
うな悲惨な境遇に陥つたまでの事情を、そ
れも心の底の秘密にまで立ち入つて知つてゐ
る者でなくては正しい直覺は出来ません。
大佐 ふんではあなたは何か被告人に關する、
秘密を御存じですか？ これは聞きものだ。

(立ちかゝる、皆々その方へ向く)

ネフリエドフ …… (眼をつぶつてゐる)

陪審長 何か特別の秘密を御存じですな、それを此の席で打ち明けて頂きたいのです。

それが被告人のために何より利益な事と信じます。こゝでお打ち明けになることが出来

ないやうな秘密だと、却つて公償の心證に

或る私情がまじつてゐるのぢやないかといふ

疑ひを起させます。公償の公平を疑ふ材料に

なるばかりです。さういふ事情なら却つて知

らない方が公平な判定が下されませう。

ネフリエドフ は、公平！ 私は事情も知ら

ないで冷やかな心から公平だと思つてゐるも

のと、事情を知つて同感するために不公平だ

と呼ばれてゐるものと、どちらが果して眞の

公平であるかを疑ふものです。

陪審長 さういふ御議論は法廷では許しませ

ん。

商人 公償、兎に角その秘密な事情といふの

を聞かせて下さい。吾輩は必ず何かそんな事

があるのだと信じてゐましたが、不公平なん

て、そんなべらぼうな事があるものですか、

公平々々つて公平面を並べてる連中なんぞ、

あれやみんな人情無しでさ。だからそんな

手合の鼻を明かしてやるために、その秘密の

事情てのを、ぶちまけてお了ひなさい。吾輩

は一から十まであなたに同感です。

ネフリエドフ …… (尙答へず)

大佐 ぢやあ別に秘密の關係も無いものと認

める外はありませんね。へつ、その方が

公償のためにもいゝやうだ。あんな女と秘密

の關係なぞがあると、ねえ君…

商人 あつたつて結構、憚りながらこゝにごさ

らつしやる御連中でも、しかつめらしい顔は

してゐなさるが、どうだい、あの女を別嬪で

ないとはい言へますまい？ 別嬪だと思へば、

もう其の心には秘密の關係が出来たのぢや

ごわせんか？

陪審長 要するにマ스로ワの一身に關しては當

然法廷に立會はれる方々、先刻檢事が述べ

られただけの事情を御承知の事と見るほかは

ありません。すなはち此女は立派な教育を受

けて、フランス語までも解し得るに拘らず、私

生兒といふ遺傳で、罪惡の血を生れながら持

つてゐたのです。身分ある家に引き取られな

がら、正當な生活を立てることが出来ないで、

其恩に背いて自墮落の行ひをなし、遂に自分

商人をたたりして其の所持金と指輪とを巻

上げんがため、錠を預つて客のホテルに行き、

ぢやうど犯罪を行はんとする所をホテルの

傭人二人に見つけれられ、遂に三人共謀して

其金を盗み、尙其罪蹟を隠す目的で客を連れ

歸つて毒殺したのであります。どうか是れだ

けの事實に基いて御意見を述べ下さい。

大佐 それから檢事はうまい論告をしました

ね。斯ういふのが即ちデカダンの標本で、教

育ある墮落分子として最も多く社會に毒

を流すものであるから、社會は少しも之れを

寛假すべき理由を認めないと、さういふ論告

でしたね。

ネフリエドフ 此の女がそれほど惡むべき墮落

者であるなら、其の罪は他人にあるのです。

當人は却つて純潔で正直であつたが爲に墮

落させられたに過ぎません。それは到底あな

た等に分らない事です。私はたいあの女の

顔にいかにも哀れな不幸な運命の影があり、

と跡を残してゐるかを見て貰ひたいと思ふば

かりです。

教師 ですから、あなたにしか分つてゐない其

の哀れな事情をお話しなすつたら如何です。

ネフリエドフ …… (尙答へず)

商人（側へ行つて）さうなさい。それが一番近道でさあ。え、公爵？

ネフリユドフ（立つて商人の肩に手をかけ）許して下さい。今はどうも話せません。それといふのも私の卑怯からです。許して下さい、許して下さい。私はたゞ……私はたゞ……私の義務としてこれだけの事を言はなくちやゐられないのです、許して下さい。（椅子の上に倒れかゝる）

陪審長 さあ諸君、議論も盡きたやうですから、マスロワは謀殺犯として有罪なるか無罪なるか、情状酌量の餘地があるか無いか、起立によつて決をりませう。（無罪有罪の起立を命じ、其数を數へる）その隅の所に着席してゐられる方は初めからどちらとも意志を表明なさらないやうですが、無罪とお考へですか、有罪とお考へですか、どちらにでもお立ち下さい。

陪審の老人職工組合長 人間が人間を擱く権利はありません。
陪審長 陪審官として法廷においての上はさうはまゐりません。
組合長 世の中に誰れ一人罪の無いものがありませうか？ 私等は神さまぢやない。

陪審長 ではマスロワは有罪ですか？
組合長 ですからすべての罪は赦されなくちやなりません。

陪審長 ではマスロワは無罪ですか？
組合長 無罪です。

陪審長 おや。それでは採決の結果、二人の多數を以て殺人犯マスロワは有罪と決定しました。

ネフリユドフ（立ち上り）有罪？
商人 かはいさうになあ！

ネフリユドフ それは實に殘刻です！ 諸君それは殘刻です！ 私はそれを辯明する義務がある！ 何もかも言つて了ひますから、どうか諸君、お待ち下さい……
陪審長 公爵、もう間に合いません。審議は終了のですから、採決の結果を尊重なさるやうに希望いたします。さあ、皆さん。（陪審長が先に立ち正面の戸口から出て行く）

ネフリユドフ（二人あとに残つて小使を呼び）陪審長の所へ行つて、ネフリユドフは病氣で列席せられませんでしたと行つて来て呉れ。それからあの辯護士のフナーリンさんが控室に見えてゐるやうだから、此名刺を渡してちよつとお暇ならこゝ迄來て下さいと言つて呉

れ。それから、今の事件の宣告が済んだら、其の結果を聞いて來て呉れ。

（小使、出て行く、ネフリユドフは心の苦しみに堪へぬ様子が室内にあるいてゐたが、テーブルの上にあつた法律全書を取つて、熱心に繰りはじめた。そこへフナーリンといふ名の賣れた辯護士が這入つて來る）

フナーリン やあ、ネフリユドフ公爵、今日は御苦勞さま、いかゞですか、裁判は進行してゐますか？

ネフリユドフ 今ちやうど宣告がある所です。フナーリン あなたは何うしてこゝにおいでですか！ 今日陪審には列席なさらないのですか？ ひどくお顔色が悪いやうですね。どうかなさいましたか？

ネフリユドフ いや、實は君に打ち明けて御相談したい事があるのです。私は此の事件の陪審官たる資格を斷つて被告マスロワのため控訴をし、それでいけなければ上告でも上訴でもして、是非ともあの女の冤罪をそゝいでやりたいと決心しました。
フナーリン 大へん御執心ですね。併しまだ裁判はさまりませうまい？ 有罪と定まつたの

ですか？

ネフリユドフ 陪審の方で謀殺犯として有罪に決めて了つたのです。けれどもそれが無實であることは私がよく知つてゐるから、是非救つてやるのが私の義務だと思ふのです。それで手續の御面倒を一つお願ひしたいと思ひましてね。

フアナリーン なる程、それは、ほかでもないあなたの事ですから、出来るだけの御盡力はいたしませうが、併し妙ですね、一囚徒のためにそれほどまで熱心におなりなさるといふのは、一體そのマズロワといふ女はもとからお知合ですか？

ネフリユドフ 知合です、或特別な關係を持つた女です。

フアナリーン ふうむ！ あなたがねえ！ いや、併しそんな事は世間にもいくらもある事ですね。

ネフリユドフ まあ其の先を聞いて呉れたまへ。關係と言つても、さう簡単なのぢやないのだ。今からちやうど十年前、田舎の別荘であの女が小間使をしてゐたころ、私が行き合つて軍隊生活の向う見ずから、つい一夜つきりに弄んで了つたのだ。

フアナリーン ふむく。

ネフリユドフ それが元で、女の嫉妬となり、流浪となりして、たうとう今のやうな賣笑婦とまで墮落して了つたのです。

フアナリーン さう聞けばはいさうでもあるが、併しあなたに取つちや、そんな事は何でもありますまい。若いときには誰れでもやることです。あなた一人に限つた事ぢやない。それに、今日の墮落はあなたが其の最初の誘惑のためだとはいへません。間接の遠因になつてゐるかも知れないが、直接の責任はあなたにある譯はありません。

ネフリユドフ 世間の人はさう言ふさ、私もさう言つて今まで自分の心を押しつぶしてゐた。併し今日私の良心は目をさまして來たのです。第一の罪惡が無ければ決して第二の罪惡は生れない。いくら遠い昔の罪惡でも、責任は其の第一歩にあるといふことをつくづく感じました。罪は罪を生んで、段々大きくなつて行く。私のあの過ちがたうとう斯んな恐ろしい結果になつたかと思ふと、私はもう此の裁判に立ち會ふ勇氣が無くなりました。

フアナリーン で、その女が冤罪だといふ理由はどこにあるのですか？

ネフリユドフ それは第一が私の心證です。私は一日あれを認めると同時に、すぐ其の顔にそれが讀めたのです。さう思つて見て行く、此事件のすべての證據はみんな不たしかなものばかりで、結局は人々の推定にすぎないと知れて來ました。斯ういふ境遇に陥るくらゐの女は、罪を犯すのが當然だといふ假定を腹の中に入れて、それから割出して行か判決に過ぎないのだ。それに比べれば私は遙によくあの女の境遇の秘密を知つてゐる、その私の推測が誰れの推測よりたしかでなくてはならない。ですから、君、此の裁判を無効にする正式の手續を考へて下さい。費用などは幾らかゝつても構はない。

フアナリーン 承知しました。併し、どうしてそれが其の女だと分りましたか？ 女が自身で法廷にそんな身の上ばなしをしたのですか？

ネフリユドフ 初めは私にも分らなかつたが、ふと呼び出された女の顔を見ると變つた中に不思議と昔のカチューシャといふ小間使に似た所があつて、それが私の眼ききにちがついてならない。何だか不安心でたまらないから、見まいくとしてゐても、やつぱり日

から見まいくとしてゐても、やつぱり日

について離れない。そんな事のあらう筈はないと打ち消して見ても、心の底から〜とカチューシャの記憶が出て来て、だん〜はつきりとマスロワの顔にその面影を認められるやうになつたのです。考へて見ると、をかしな話だが、昨夜不思議に十年前の事を夢に見ました。今まで忘れよう〜とつとめてゐた結果、まるで思ひ出しもなかつた事を、どうしたはずみかふつと夢に見たのが、今日の記憶を助けたに違ひありません。初めマスロワと言つてるあひだはまだ半信半疑であつたが、カチューシャといふ名を言つたので愈々それに違ひないと分つたのです。そして向うも何度か私の顔を見たが、向うには私といふことは到底分らなかつたやうです。起訴狀の朗讀や、檢事の論告のたびに、顔を赤くして自分の罪狀に驚いてゐる様子や、最後にたいそんな悪い事をした覚えはないといつた限り泣きくづれたさまは、いぢらしく見てゐられなかつた。そのため私はたうとう卒倒しかけたのです。あゝ、あの最後の言葉を思ひ出すと、今でも體がふるへて来る。

フアナリーン 分りました〜。あなたは大部分感情が興奮してゐるやうだから、早くお歸り

になつた方がいゝでせう。

(小使入り来る)

小使 たゞ今宣告がすみました。マスロワは徒刑囚としてシベリヤへ移されることになりました。

ネフリユドフ え、シベリヤ? (立ち上つたまゝ茫然としてゐる)

(小使去る)

フアナリーン 徒刑囚、シベリヤ。ようございます。早速一件書類を調べて控訴の手續をしておげませうから、明日にもちよつと私の事務所へおいでを願ひます。其のとき萬事御相談をさせら。今日は早くお歸りなさるがよいと思ひます。

ネフリユドフ ありがたう〜。それでは何分とも願ひます。さやうなら。

(フアナリーン、下手口から去る。ネフリユドフしばらく立ちゐて)

カチューシャがシベリヤへ。…それでいよいよ私のする事も分つて來た。私もシベリヤまで行かう。シベリヤはおろか、世界の果までもつて行つて、あれの體と靈魂とを救つてやらなくちやならない、さうだ、私にはもう財産も地位も用はない、身の累ひになるも

のは一切棄てて了つて、明日からは體一つになつて過去の罪を贖はなくちやならない。それでこそ、久しくなえてゐた良心に申譯が立つ。あゝさう思ふと何だか急に身が軽くなつて、清々するやうな氣がする。カチューシャ、カチューシャ、決してお前一人をシベリヤへはやらないから堪忍して呉れよ。

(小使下手口から入り来る)

小使 御婦人のかたが、馬車でお迎ひに見えました。

ネフリユドフ (きよつとして) 今日には氣分が悪くから失禮しますと言つて呉れ。

(小使が行くと入れちがひにミシー盛装して入り来る)

ミシー 何うかなすつたの? 手紙であんなにお約束して置いたのに、今日は失禮するなんて、ひどいわ。ほんとに御氣分が悪いのですか?

ネフリユドフ (慰めるやうにミシーの手を取つて) ミシーさん、堪忍して下さい、今日の裁判が私の氣を顛倒させて了つたのです。今日は氣分がわるくて、とても御一緒に行くことは出来ません。(ちつとミシーの様子を見てゐたが突き放すやうにして) 或はこれき

り、永久御一緒に行くことは出来ないかも知れません。

ミシー (泣聲になつて) あら、私どうしようかしら。なぜだしぬけにそんな事をおつしやるの? 何うかなすつたの? 今日裁判でどんな事があつたのですか、聞かして頂戴。

ネフリユドフ まあ、ちよつとこゝへおかけなさい。今日は實に重大な事があつたのです。お宅でゆつくり話せばいいのだが、それもなく無駄な事のやうですから、こゝでかいつまんで言つて置きます。よく聞いて置いて下さい。

い。
ミシー (段々眞面目になつて) 何でせう?
ネフリユドフ 私はね、今までまだあなたと公然結婚の約束をした事はないが、その前に斯う言つたらあなたはどうします? — 私は決して清淨無垢の人間ぢやないと、さう言つたら?

ミシー 別に何とも思ひやしませんわ。何をおつやるのだらう、ぐらゐにしか思ひやしません。
ネフリユドフ 私の過去には或る大きな罪惡があります。それを今いよゝ贖はなくちやならないやうになつたのです。それを贖はない内は私は決して無垢の人間ぢやありません。

せん。
ミシー ちや、それを贖つたらいいぢやありませんか? 私どんな事だつて、あなたの爲ならお手傳ひしますわ。
ネフリユドフ それを贖ふためには、あなたと此の上の御交際は出来ないので。あなたのお家とも是れきりなる他はありません。私は明日から、地位も財産もない、貧乏な平民になつて了ります。
ミシー まあ、そんな大變な事になるのですか? 一體その罪惡といふのは何でせう? 聞かせて下さいな?
ネフリユドフ それは私が過去の男の生涯です。それだけ言つて置けばいいでせう。
ミシー 男の生涯!
ネフリユドフ あなたはまだ年が少くないから、此のうへ打ち明けて聞かすことは出来ませんが、私は其罪を贖ふために、囚徒の女と結婚するかも知れません。
ミシー まあ、どうかしていらつしやるのね?
ネフリユドフ どうもしちややめません、本當の事を言つてゐるのです!
ミシー ちや、まあ! あなたは私をだましていらつしやつたのですね?

ネフリユドフ だました譯ぢや決してありませんが、今までは大して悪いとも思はなかつた事が、今日の裁判ではじめて恐ろしい事だとなつたのです。ですから此のうへあなたと一緒にゐては、それこそあなたをだます事になります。どうか今までの事はあれきりにして忘れて下さい。お頼みです。
ミシー あゝ、あなたは! (蒼白になつて) もう澤山です、もう澤山です! 分りました。どうか御自由になすつて下さい。私も帰りますわ。お母さまが待つていらつしやる筈だから……さやうなら。

(ミシー出て行く。ネフリユドフ見送つて立つてゐる) (幕)

第三幕

モスクワ監獄の女囚室の一、正面中央に大格子窓、其奥は薄暗い室と假定する、格子窓の上手に大扉、其横手に格子窓、下手横に鐵の小さい扉。室内には隙に寄せてベンチや粗末な寢臺や木箱が置いてある。遅い午後。

女囚三四人、マスロワを取巻いて騒いでゐる。

大ロシヤ（と縮名せられた女）（窓から外を見て）やい、そこにゐる爺、てめえ、もう濟んだのかい？

老女囚 だまれつたら！ 業つくばりめ。お祈りの邪魔になるぢやないか！

大ロシヤ 何だと？ 牢に這入りやがつて、お祈りも神さまもあるかい、大陽婆め。

老女囚 今に見てゐろよ、あたしが、何うするか。（神の像の前に膝をついて）お救ひのマリアさま、どうか私たちをお守り下さい。そしてあの大ロシヤめを足腰立たない目にはせてやつて下さい。

美人（と縮名せられた女）ほんとに、もう澤山だよ。あの肺病やみは奥でゴホ／＼やつてゐるし、大ロシヤは悪たいのつきどほし、お婆さんはグシヤ／＼お念佛ばかり言つてゐて、うるさくて／＼しやうがない。

大ロシヤ（尙窓の外へ）さうだよ爺、私窩子だよ、モスクワの私窩子だよ。若くて綺麗でさ……羨ましくはないかい？

美人 一體誰れと話してゐるんだ？（覗いて見

て）いやだ！ あの禿ちよろの、狎ころ親爺とだよ！ 呆れつちまふよ。

看守（下手口から入つて来る）こら、静にしないか？ 大ロシヤ、窓の外へ何を言つてる？ 窓を離れなさい、窓を離れなさい。

大ロシヤ はい／＼、小言を喰ふのはいつも私ばかりよ。

看守 お前の聲が一番大きいからだ。

大ロシヤ あの大陽婆さんだつて、随分大きな聲をしますわ。

老女囚 餘計な事を喋るない。自分が叱られやがつたものだから、小言の相棒をこしらへようと思やがつて。看守さま、此の檻房で暴れるのはあいつ一人でございますよ。こつびどく喰はしてやつておくんないまし。

大ロシヤ 何だこの婆め。

看守 こら／＼。二人ともそのざまは何だ？ 静にしないと、またひどい日に逢ふぞ。みんな仕事でもしてゐる。

（マスロワは正面窓下のベンチに腰をかけ、両手に顔を埋めたまゝ、初めから何も言はないでゐる。フョードシアが之も無言で其傍で編物をしてゐる。老女囚は床にすわつて縫物をしはじめ、大ロシ

ヤ、美人等はそこらにぐつたり腰をかけてる。一人の無言の女は、始終室の端から端へ行つたり来たりしてゐたが、此時寝床の上に向うむきに寝て了ふ。舞臺しばらく森となる。看守出て行く）

フョードシア（マスロワに）お前さん、まだ泣いてゐるの？ ねえ、私、これからお前さんの事を姉さんと言はせて頂戴な。お湯を貰つて来てあげませうか？ 其の巻パンでも喰べたらどう？ 随分お腹がすいたでせう？

美人 この人がシベリヤへ流されようとは、全く思はなかつたよ。無罪放免で、お金でも貰つて歸つて来るだらうと思つてゐたのさ。

フョードシア 一たい何年くらゐ向うに居ればいゝのだらう？

大ロシヤ 二十年ていふぢやないか。

フョードシア 二十年？ まあ！ そのあひだには死んぢまふわねえ。

大ロシヤ 死ぬとも。シベリヤへ行きや、大ていの奴は二年か三年でくたばつて了ふさうだよ。

フョードシア（すゝり泣きながら）私、死ぬまゝ、姉さんの傍は離れないわ。

老女囚 それだから私がい言はないことぢやな

い。い、辯護士を頼んで、うまく言ひぬげなくちや駄目だつて。

マスロワ (顔を上げて) あゝ、もう何も言つてお呉れでない。シベリヤだつて何だつて構ふものか。行けといふなら、何處へでも行くさ、シベリヤでもサガレンでも。私一人、此の世にゐるのがそんなに邪魔なら、いつでも来て殺すがいい、縛り首にでもするがいい。

老女囚 だつてお前、言ひぬげられるだけは言ひぬげなくちや諛だよ。

マスロワ 言ひぬげるつて、私には、言ひぬげることも何もありません。私には、言ひぬげることも何もしやしないのだよ。たゞ私がこんな商賣をしてるばつかに、みんなで、よつてたかつて私を罪人におとしちやつたのだよ。だから私もうあきらめちやつた。こんな體になつたのが私の不運だよ。

老女囚 世間の奴ら、ほんとに憎いつちやない。みんな大悪人の癖に、大きな面をしてやがつて、こちと等のやうな弱いものが、何かするつとすぐ罪人呼はりしやあがる。こちと等の方がよつほど善人だいい。

大ロシヤ 全くさうだよ。
美人 正直なものが馬鹿を見るんだよ。

老女囚 あゝあ、お縫子申すのは神様ばかりだ。(また聖像の前に立つて) お救ひのマリアさま、どうぞ私どもをお守り下さい。

大ロシヤ およしよ、馬鹿らしい。
マスロワ 私たちの神さまは、もう疾くに居なくなつたのだねえ! (次の臺詞のあひだ、マスロワはそつと奥の室へ這入つて行く)

老女囚 何がさ、お前、神さまがおいでなさらなきや、此世は全くの闇だ。せめて神さまお一人をたよりに、私たちが生きて行けるのぢやないか? 神さまのお心に背いちや、私たちだつても何も出来ない。

大ロシヤ もう何も出来ないぢやないか! こんな所へ來ちやあ、生きてるも死んでも同じことだ。神さまに守つてもらつてる奴が牢屋へ來るかい。

老女囚 だから世間が悪いといふぢやないか! 手前だつて、神さまのお心に背いたためにこんな所へ來たとは思つてゐない?

大ロシヤ 私は世の中に神さまも何も居ないと思つてゐるよ。甥が間違つた召集で徴兵に取られようとした時、村中のものが集つて巡査に手向ひしたのを、現在伯母の私がどうして黙つて見てゐられるかい。私は飛び出し

て、甥を乗せた馬の鼻づらを押へて、巡査を刎ね飛ばしてやつた。それが悪いと言つてこんな牢屋へ入れやがつたのぢやないか。神さまがほんたうに居たら、こんな無法な眞似をさせて黙つて見てゐるだらうか?

老女囚 さう言や私だつて、二度目の亭主の奴が、爺の癖に私の連れ子の阿魔と巫山戯た眞似をしやあがつて、あんまり情ないから、ぶつた切つてやつたのさ。どつちが善いか悪いかは神さまが見てゐて下さる。それから此の人だつて、美人の方を指して) こんなにお洒落してゐても、娑婆ちや鐵道の線路番のおかみさんで、信號の旗を振るのを間違へた爲に汽車が衝突したのだといふぢやないか? 誰れが好き好んで汽車を衝突させる奴があるものか? ねえ、怪我だあね。それを後に見せしめだといつてこんな所へ抛り込んで、抛り込まれたやつこそいゝ面の皮だ。お前さんが運わるく損な番に巡り合はせたのだよ。それからあの物を言はない女だつて、自分の子どもを河へ投げ込むにや、よく辛い課があつたのだらうさ。それはみんな神さまが御承知だ。

(この時ちよつと森となる、先ほど寢床

の上に横になつた女の、噓り泣きの聲が聞える。みなく其方を振り向く。

フヨードシア あれはね、寝ると昔の事を思ひ出して、それが夢だか現だか、どうしても分らないのだつて。昔惚れてゐた錠前屋さんの事を思ひ出して泣くのだつて。かはいさうねえ。

（マスロワ、奥から酒氣を帯び、ウオツカの瓶を持つて出て来る。）

マスロワ さあ、みんな景氣づけに一杯やらな
いか？

（腰をかけ、一口喇叭飲みにして、大ロシヤに渡す。老女因は顔をしかめる。美人寄つて来て、瓶を大ロシヤの手からひつたくるやうにして飲んで、マスロワに返す）

フヨードシア （マスロワに）姉さん、またそんなに飲んぢやいけないわ、もうおよしなさいよ。

マスロワ これが飲まずにゐられるかい、お前。飲むとこんなにいゝ氣持になるぢやないか？昔の事も今の事も、みんな忘れちやつて、たゞもういゝ氣持だが、今日は私、全く驚いぢやつたよ。私が罪人だなんて、ねえ、どうす

れば、そんな事が言へるのだらう？ このかはいゝカチューシヤが人を殺したなんて。ほんとに驚いて了ふわ！ その癖、みんなで、私を見ちやニコくして喜んでゐた癖に、裁判所でも、あの意地のわるい檢事のほかは、みんな私に色目をつかつてゐたよ。

美人 男といふ奴は、みんなそんなものよ。女と見れやあ、砂糖に蠅のたかるやうに集まつて来るのよ。

マスロワ だけど、それが悪いのでもないし、誰れが悪いのでもないのよ。あたりまへの事なのよ。ねえ、私は斯う思ふのよ。一體世間の男は、どんなものでも、好い女を欲しがらないものはないし、好い女はさうして欲しがられるために出来たのだから、精々欲しがらすやうにするのが當りまへだわ、私も今まで随分と、いろんな男に出つくはしたが、ただの一人だつて私を欲しがらないものは無かつたよ。私なにも、自分が好い女だか何うだか、そんな事は知らないけれど、みんなが欲しがらるから好い女なのだらうと極めちやつたのよ。全く、出つくはす男も、出つくはす男も、みんな私一人を前に、いろんな智慧を絞つたり、金をつかつたり、喧嘩をしたりし

て来たのだもの。
大ロシヤ さうだらうとも。其の話を聞かしてお呉れよ。

マスロワ 聞かさうかねえ。まづ一番にね、私にねらひをつけて来たのが、私の育ててもらつた別荘の若旦那でね、身分の高い人だつたのよ。それがお前、たうとう私を手ごめにして、翌の朝、百圓札一枚私の懐へ押し込んだきり行つちまつて、二度とたよりもしなくなつたのよ。

老女因 百圓札を！

マスロワ あゝ、百圓札を。だけど其のころは私まだ金なんか欲しくなかつたものだから、其の金をみんなに呉れちやつて、さうかうしてゐる内に私は妊娠したと分つたのさ。それで別荘にも居づらくなつて、或る役人の家へ奉公したのさ。するとお前、その主人といふのが、五十面を下げて、うるさく私に附きまつて来るぢやないか。あんまりうるさいものだから、馬鹿野郎とどなりつけといつても飛び出したさ。其のうち生み月になつたものだから、村で造り酒の抜け賣りをしてゐる産婆の家へころがり込んで、子どもだけはそこで生み落したが、其の子はすぐ孤兒院で死

んで了つた。

美人 かはいさうにねえ。

マスロワ 其の次に奉公したのが山林の役人だつたが、その主人は前の役人よりも上手だと見えてね、たうとう私をおびき出して、うまく手に入れて了やがつた。けれどそれも長くは續かないで、その家の細君と掴み合ひの大喧嘩をして、給金を踏み倒されて飛び出しちやつた。(酒を又一口飲んで次へ廻す) 大ロシヤ そんな分らない奴は、張り倒してやればいゝの。

マスロワ それから何處だつて？ さうく、伯母が洗濯屋をしてゐるから、その洗濯女にならうかと思つただけだね、それもあんまりみじめだと思つて、桂庵の手から或る女主人の家へ奉公したのさ。すると今度はその總領息子で中學の五年生といふのが、もう口髭なんかはやししてゐてね、學校そつちのけに私の跡ばかり追ひ廻してゐるものだから、私がそゝのかしてでもゐるやうに母親から睨まれて、そこも長續きはしなかつたのさ。

美人 油断もすきもあつたものぢやないね。

マスロワ それから二度目に桂庵へ行くと、又傳手で或る旦那といふのに引き合されたが、

それが髪も髭も胡麻鹽になつた春の高い男でね、無氣味な眼つきをしてニヤ／＼笑ひながら私にぶざげかゝつて來たのよ。するとおかみが其の男を次の間へ呼び出してどうです旦那、田舎から出たての手いらすの處女ですよつて頻りと取り持つてゐたが、たうとう二十五圓で世話になることに話がついたの。でね、私は貰つた手附金で借りを返したり、着物や帽子を買つたりした。

美人 つまり旦那取りだね！

マスロワ あゝ、だけど私は、よく／＼男運の悪い女だと思つてね、その旦那の世話で引き越した下宿の隣り部屋に、面白い氣象のお店者がゐて、いつか其の男と出来てしまつたのさ。さうなると私の氣象で、其のまゝぐづ／＼してゐるのがいやで、さつぱりと旦那に打ち明けて別れて貰つて、其の男と一緒に世帯を持つたよ。所がそのお店者め、い頃合のところ、商用だとか何とか言つて出て行つたきり歸つて來ないで私を置き去りにして了やがつた。

大ロシヤ 憎いつたらありやしない。そんな奴こそ、目つけて引つばたいでやるといゝのに。

マスロワ さうなつて行くのが、つまり私の運だつたのだねえ。そして私はその頃からやけ酒を飲むことをおぼえて、一日酒浸りになつてゐることもあるし、しらふの時、つく／＼自分で自分に愛想のつきることもあつて、もうもう私の體は何うなつていゝから、したい三味の事をして過ごせといふ氣になつたよ。そして或る女衞の手で、私はたうとう今までゐた家へ身を沈めて了つた。それがめぐりめぐつて、こんな落ちになつちやつたのさ。ねえ、人の行末ほど分らないものはないわねえ！ (また酒をあふる) はゝ、はゝ。今度はシベリヤかサガレンへでも行つて、その牢番のおかみさんにもなるかねえ？

美人 でも、其程の男の中で、お前さんの方が打ち込んだ男があつたかえ？

マスロワ それは一人や二人はあつたさ、私を置き去りにした男だつて、憎くはなかつたよ。だけどやつぱり一番長く残つて、今でも時々思ひ出すのは、初戀だね。その公爵の若さまだけは、其の頃の、うぶな心でしみ／＼かはいと思つたつが、今から思や薄情者だつたのねえ。

美人 お店者でも公爵でも、揃ひも揃つて薄情

者だつたのだね!

マスロワ あゝ、だからもう「男」といふものはたよりにならないものと極めちやつたのさ。(また酒を飲む) あゝあ、随分長い身の上話をしちやつたわね。

フヨードシア さあ姉さん、水をあげませう。もう其のお酒はおよしなきいよ。私が斯うしてしまつて置いてよ。(ベンチの下から薬罐を出し、水をコップについですゝめ、瓶をそこへ隠す)

マスロワ あゝ、いゝとも。煙草が一瓶呑みたいねえ! 誰れも持つてゐないの? おやおや、今日は不景氣だね。

フヨードシア 私、あとであの押丁さんにねだつて置いてあげるわ。

マスロワ ありがたうよ。今度はお前さん一つ身の上ばなしをおしよ。そんな優しいいゝ人が、どうして自分の御亭主を殺さうなんて、大それた事を思ひつたの!

フヨードシア それはね……私ほんとに不仕合せだつたのよ。私がお嫁に行つた時は、やつとまだ十六だつたの。でね、見たことも無い人の所へ無理やりお嫁にやられて、私、ただ恐いばかりで、ほかになんにもありやしな

いのだから、泣いて泣き通して、どうしても其の人と一緒にやつてやらなかつたの。私、今考へると、あの時の心持が自分でも分らないわ。きつと魔がさしたとでもいふのでせうね。たうとう其の人を殺しても自由に なりたいと思つて、そんな眞似をしちやつたのですよ。それなのに、不思議なこともあるものだわね、八月ばかり保釋になつてる間に、すつかり其の人が好きになつたの。駭者をしてゐるのだけれど、それや氣立の優しい人でね、今ちや兩方から離れられないやうになつてゐるのよ。それでどうか此の事を願ひ下げにしたいと思つたのだけれど、もう間にあはないのですつて。そして五年の宣告を受けて、此のさきどうして生きてゐられるでせう。ねえ、姉さん、察して頂戴。

(看守入り来る)

看守 マスロワ、これをお前の主人だといふ女の人が差し入れて行つたよ。金が二圓五十錢と巻煙草が一函。

マスロワ お金と巻煙草! そらね、言はないことぢやない。今日は何か福があると思つたのだよ。看守さん、どうも有りがたうございしました。

看守 禮はその人に言へ。

マスロワ それやさうですけどさ。その人はきつと私をかゝへてゐた家のおかみさんですよ。看守さん、どうぞよろしく言つて下さいな。(看守の出て行く後から追うて行つて、出口の所で銀貨を一つ握らす) さあ、これで、呑みたいと思つた煙草にもありつけたと。マツチはどこにしまつてあるの? (一本つけて、うまさうに貪り吸ふ) あゝあ、酒と煙草の中に私の命はあるんだね!

(煙の香を嗅いで他の女等、羨ましさうに寄つて来る)

老女囚 (さつきから縫つてゐた針仕事を下に置いて) 私にも一本相伴させてお呉れな。

お前さん、辯護士に控訴の事を頼んだのかい?

大ロシヤ 私にも一本お呉れな。控訴する時には、お前さんの名を書かなくちやならないのだが、そんな手續はしなかつたらうね。私が知合の上手な辯護士を世話してあげようかしら。

老女囚 そんな事は、お前さんよりも、私の方が明るいよ。

大ロシヤ 私、なにもお前さんに言つてるのぢ

やないよ。餘計な事をお言ひでないよ。

老女囚 へ、煙草が呑みたいものだから、急に

お世辭をつかひやがつて。

大ロシヤ どちらがだい？ この百びる婆め。

老女囚 業つくばり、今に見てゐる、晩になる

とたぐちや置かないから。

美人 まあ静におしよ。

大ロシヤ へん、誰れが百びる婆なんか恐がる

ものかい。

(看守再び這入つて来る)

看守 くら〜。また騒ぎ出したか？ 静にし

ろ、靜にしろ。(鐘が鳴る) そら、もう晩の

お祈りの時刻だ。みんな列をつくつて行くの

だぞ。列をつくれ、列をつくれ。

(女囚一同列を造り、看守の跡について上

手口から出て行く。舞臺ちよつと空虚と

なる。やがて下手口から看守に伴はれて

ネフリユドフ、フアナリーン入り来る)

看守 囚人は今禮拜堂の方へ行つてゐますか

ら、マスロワだけ先にこゝへ連れて來ます。

御面會の時間はかつきり十五分ですよ。

フアナリーン 典獄に特別談判をして來たので

すから、十五分と限つた以上、それより延びて

はよくありませんし、他の囚徒の歸つて來な

い前にお済みにならないと、此の室で會つて
ゐるのが犯則になります。だから御用談はな
るだけ早くお進めになる方がいゝでせう。

ネフリユドフ ありがたう、ありがたう。では
しばらく、どうかあなた方はあちらでお待ち
下さい。

(フアナリーン、看守、出て行く) ネフ
リユドフはそこに立つたまゝ、室内を見
廻してゐると、下手の戸があいて、マス
ロワ小さざみの足つきで這入つて來る。

ネフリユドフの顔を訝り見ながら、ちよ
つと髪を撫で、數歩前に立留まつて、其
りうとした身なりを見、媚びるやうな微
笑を浮べて)

マスロワ 今日日は。あなたですか、私に面會し
たいとおつしやるのは？

ネフリユドフ (胸を躍らせ聲をしゃがらせな
がら) 私だが、お前、もう忘れたらうね？

マスロワ (まぶしさうにして媚びる態度で)
さうね、どなたでしたつつか、今ちよつと思
ひ出せませんわ。だけどきつと、私をかはい
がつて下すつた方でせう？

ネフリユドフ (帽子をぬいで一二歩近より)
私たよ、よく見て思ひ出して下さい。さあ—

分つたか？

マスロワ (しつかりとは見ないで、そは〜と
して) え、おぼえてゐます、おぼえてゐま
す。お名前はあの…さうでしたつけれ？

ネフリユドフ ネフリユドフ。

マスロワ (耳にとめないで) さう〜、よくお
るお名前でしたつけれ。で、どうして私が分
りましたか？

ネフリユドフ 昨日裁判所で、陪審官になつて
お前の裁判に立會つたが、お前は氣がつか
かつたらうね？

マスロワ まあ、さうでしたか！ ちつとも氣
がつきませんでした。ちや、あなたも御一緒
で私を裁判なすつたのね？ 私シベリヤへ

やられるのですつてね？ (言つて唇をふる
はせ) あんまりひどいわ、無實ですわ、ま
ちがひですわ。私決してそんな悪い事なんか

しやしません。…でもあなた、どうして途
ひに來て下すつたのですか？ 裁判がどうか
なるのですか？

ネフリユドフ その事來たのだが、私はどん
な事しても、お前のその無實の罪を救つて
あげようと決心したのだよ。

マスロワ ほんたうに御親切ね。(つゝましや

かに男に近づき、娘らしい調子で、あなたね、若し實際私を助けて下さるおつもりなら、少しお願ひがあるのよ（賤しげに誦ひ笑ひをする）

ネフリユドフ あゝ、何でもするから、言つて下さい。

マスロワ かなへて下さつて？ どうもありがたう。私ね、何よりも先に控訴しなくちゃいけないのださうですが、いゝ辯護士を頼むとお金が大人かゝるんですつてね。

ネフリユドフ その事なら、もう私が手續をして来たから安心して下さい。今日来たのもお前にそれを承知して置いて貰はうと思つたからさ。で、もし控訴でいけなければ上訴でも何でもして、是非ともお前を救ひ出すつもりである。金のことなんか少しも心配するに及ばない。

マスロワ（わざと嬉しげに）まあ、うれしいこと！ それで安心しましたわ。それから今一つのお願ひのはね、……（躊躇して）私少し買物が見たいのですけど、……あんまり澤山頂いても無駄につかつたり、みんなに借りられたりするばかりですから……ほんの少しばかり……お錢をね……十圓でいゝのです

よ、ただそれだけでいゝの。

ネフリユドフ お錢を？……（絶望の様子で）あゝ、あゝ、いゝとも、上げるよ。

マスロワ ちよつとお待ちなさい。看守があつちへ向くまで。（外の方にゐる看守の様子をふりかへり見て、後向きにさもしげな手つきで金を取らうとする。看守の姿見えなくなる）さ、さ、早く下さいな。どうも、ありがたう。（急いで其金を靴下の中へ隠す）

ネフリユドフ（ちつと見てゐて絶望のためいきをする）あゝ、お前、そんなにまでなつたのか？

マスロワ え？ 何ですつて？（見上げて媚び笑ひをし）それや、もう、どうせ牢屋へまで来たんでしょもの、貧乏もしますわ。このつきいらつしやる時に、若しまた願へたら、またお錢を少し貸して下さいな……、それから巻煙草を少し持つて来て下さるといゝのだけれど……あ、さうく、私、今一つお願ひがありますわ。（また看守の姿を見て）あなた、あいつに二圓ばかり掴ませておやんなさいよ。ネフリユドフ よし〜。

（看守の方へ行く。マスロワは其の間に

ベンチの下の酒の瓶を取り出し其の口から酒をあふる。ネフリユドフの入り来るのを見てあわてて瓶を後手に隠し壁の方へ寄る）

マスロワ 今、水とコーヒと交ぜたのを飲んだところなの。私、一日中何も飲まなかつたものだから、喉が渴いて、喉が渴いて、こゝが焼けつきさう。（苦しげに胸をたたく）

ネフリユドフ お前今、何かまだ私に頼みがあると云つたね。

マスロワ さう〜、さうでしたつて、……何だつたらう？ あ、さう〜、私の妹分だね、フョードシアといふ女囚がゐるのですよ。それやかはいゝ女だね、何も知らない内にお嫁にやられたといふので、御亭主を毒殺しようとしたのですつて。それが保釋される間にすつかり仲なほりが出来て、今ちや羨ましい程な夫婦仲なのなのに、どうしても罪に落ちなくちやならないのださうです。あの子も、ついでに救つてやつて下さらない？

ネフリユドフ ふむ……それは調べて見なくちや分らないが、辯護士に頼んで見ようよ。私はね、お前を一日も早くこんな所から救ひ出して、せめてもつと静な病院か何かの方へ

でも廻して置きたいと思ふのだが、何なら其の女も一緒にその方へ行けるやうに運動しよう。

マスロワ さうして下さるとありがたいわね。ネフリユドフ もつと周囲の静な綺麗な所へでも移つたら、お前の眠つてゐる靈も眠をさまして来るだらう。

マスロワ お説教のやうだわね。

ネフリユドフ あゝ、カチューシャ、お前はまだ本當の事を想ひ出して呉れないのだね？ネフリユドフ といふ名が分らないのかい？

マスロワ 何だか變ですわね、ネフリユドフだのカチューシャだのつて。あなた、どうしてそんな名前を御存じ？

ネフリユドフ (十年前の寫眞を取り出して女の手に渡し) どうか此の寫眞を見て思ひ出してお呉れ。

マスロワ (寫眞を手にとつて) あなたののですか？ 女のかたもいらつしやるのね？ 綺麗ですこと！ (尙ちつと見てゐる)

ネフリユドフ よく見て下さい。十年前お前がまだ、私たちの別荘にいた頃の寫眞だ。あの、復活祭の晩、事を お前はもう忘れたのか？

マスロワ (男の顔に目を向け、ちつと見て身

ぶるひし、寫眞を床の上に投げつけ、飛び上がるやうにして、覺えず拳を固め) この悪魔め？

ネフリユドフ (マスロワの撲らんとするのをちつと受けて) カチューシャ、私はお前にあやまりに來たのだよ。

マスロワ 悪魔！ 悪魔！ 薄情者！ あなたのやうな薄情者は、私がこんなさまになつたのを見物する氣でも來たのでせう？ よく私の前で、あなたの名前が名乗れたものだ。

ネフリユドフ カチューシャ、みんな私の罪なのだから、どうか許して呉れ。

マスロワ それだけの事なら、何もこゝまで追つかけて來る必要は無いぢやありませんか？ こんなになつてる私を、なぶつてやらうと思つて來たのですか？

あなたにだけは私、こんな境遇で會ひたかなかつたのですよ。それをわざと探し出して、こんな悔しい恥かしい思ひをさせられて：あゝ、私、あひたくない、あひたくない！ (兩手に頬を埋めて泣く)

ネフリユドフ 私は實に申講の無い事をした。十年前のお前に對する不始末が昨日の裁判を

見て空恐ろしくなつて來た。私はどうかして其の罪が贖ひたいと思ふのだが、カチューシャ、どうか私を許して呉れ。

マスロワ (顔を上げ涙を振り拂つて) 御免なさいよ、私が悪うございました。私もう疾くのお顔を見られた筈でしたつて。ついあなたの顔を見たものだから、あんなに怒つちやつて。でも、みんな運ですわ。そんなに心配して下さらなくてもようございます。お互にあ

頃の事は、もう忘れられてしませうよ。ネフリユドフ いや、忘れてゐるのが私の過ちだつたのだ。：(苦しげな沈黙の後) 子どもがのたつてね。

マスロワ え、おましたけれど、都合よくすぐ死んぢまひました：。

ネフリユドフ 都合よくつて、どうしてそんな事をいふのさ？

マスロワ だつて、生きてでも居られたら、私が死んぢまひますわ。私もその頃病氣だつたのですよ。

ネフリユドフ 叔母たちがお前に眼を出したのだつてね？

マスロワ (娘らしい怒りをちよつと見せて) 當り前ですわ。身重になつてるものを、誰れ

が使つて呉れるのですか。それよりか叔母さまたちは何うなすつたでせう？

ネフリユドフ あれ等は二人とも先だつて死んでしまつた。

マスロワ あら、まあ？…あゝ、もう、そんな事は考へつこなしにしませう。みんなお仕舞になつた事ですから。

ネフリユドフ いや、まだお仕舞ぢやないよ。

私はどんなにしても過ちを贖はなくちやならない。そのすまない内はお仕舞ぢやない。

マスロワ つまらない事ですわ。何も贖ふものなんかありません。過ぎ去つたことはしやうが無いぢやありませんか？

ネフリユドフ 一そ私の財産を残らずお前に譲つて、それで罪亡ぼしをしようかと思つたが…。

マスロワ 冗談はおよしなさいよ。もう時間が來ますよ。

ネフリユドフ とても／＼そんな事で濟むものぢやない。やつぱり、私のこの體で救はなくちやならないのだ。行くところまで行かなくちやならないのだ。ねえ、カチューシャ、私はお前の體の清まりきるまで、何處までも

ついて行つて、どんな事でもするから、それで私を許して呉れるだらうね？

マスロワ なんて許いのでせう？ 私、あなたを許すことなんかありませんわ。昔の事なんか言ひつこなしですよ。さあ、もうお歸りになるのでせう？（軽く手を握つて）辯護士のお金の事は頼み申しましたよ。

ネフリユドフ その事はたしかに引受けたから、書類が出来次第、お前の名を書いて貰ひに來ます。けれどもお前は、たゞそれきりで別れるつもりかい？ 他に言ふことはないのかい？ 許すとも許さないとも、憎いとも懐かしいとも言つて呉れないぢやないか？

マスロワ そんな野暮つたい話はお止しなさいよ。

ネフリユドフ カチューニシヤ、どうか是度は眞面目に附いて置いて呉れ。私は今日限り地位も財産も棄てて了つて、お前を救ふ爲に、お前と結婚しようと思ふのさ。

マスロワ (ちつと聞いてゐて、屹となり) 何ですつて？

ネフリユドフ (決心の調子で) お前を救ふために、お前と結婚でもする。

マスロワ 結婚もするのですつて？

ネフリユドフ あゝ、それが私の、神に對する義務だと思ふ。

マスロワ (ちつと見すゑて、唇を顫はせ、抑へがたい悲憤と冷笑の調子で) 神に對する義務だつて！ はゝ、はゝ、神さまのお引合ひなんか、お止しなさいな。神さまを頼むのな

ら十年前だつたのでせう？ (顔をネフリユドフの方へ突き出す。酒の息がする)

ネフリユドフ お前、酔つてるね。まあ少し落ちついてお呉れ。(肩に手をかける)

マスロワ 振りはなして) 私、落ちついてますよ。さう、酔つてもゐますさ。けれど酔つたつて、言ふ事は正氣よ。ね、あなた、お聞きなさい。私は醜業婦なのですよ！ 人殺しの罪人なのですよ！ はゝ、私はさういふ身分

のものです。そしてあなたは、公爵の御前でいらつしやる。それがまあ、私と夫婦にならうとおつしやるんだから、とほけてるわね

え、随分とほけてるわね。そんな馬鹿な料見はお止し遊ばせ、御身分にさはります。あなたの奥方には、どこかのお姫さまでもお迎

へ遊ばせ。私が御用なら、十圓札一枚で、いつでも御用を達しますよ！ (酒瓶を片手に持ち、片手を其の上に載せて憤怒の形相でつ

立つ、調子は初めわざと冷嘲であつたのが、段々怒りに移る。

ネフリウドフ 靜にして呉れ、カチューシャ、私がどれ程良心に恥ぢてゐるか、お前には分らないのだ、そんな恥かしい事を言つて……

マスロワ 恥だつて？へッ！ どうせ私は醜業好き！十圓札で御用を達すに不思議はなからう？もつともお前さんはあの時百圓札を私の懐へねぢ込んで逃げて出したつね。

ネフリウドフ カチューシャ、カチューシャ、みんな私が悪かつたのだ。だから正式に結婚して、罪を贖はして呉れといふぢやないか？お前は正氣を失つてゐる。

マスロワ まだふざけた事を言つてるのかい？私をだしに使つて自分の罪を贖ふんだつて！へー！い、料見だ！此のうへまだ私をなぶり物にしよといふんだね！私に恥をかかせようと思つてやつて来たんだね？……さあ！私に指一本でもさして見ろ。お前さんと結婚する位なら、首でも縊つて死んだ方がましだ！私、もう、その生つ白い脂ぎつた顔

を見るのも嫌だ。さあ、もう、いゝ加減に歸つて行かないか？ 出て行け！ 出て行け！

(地だんだを踏んで罵り、また酒をあふり瓶を傍に置く)

ネフリウドフ (涙ぐんで) ちや、今日は歸るが、どうぞあとで、一度思ひ直して呉れ。お前に見せようと思つて持つて来た寫真だから、之れは預つて置いて貰ひたいよ。(寫真を拾つてマスロワに渡す)

マスロワ (寫真を渡されて見るともなくそれを見込む。そして聲をあげて泣く) あゝ！なぜ、あの時死ななかつたのだらう？なぜあの時死ななかつたのだらう？(寫真を抱いたまゝ横倒しになる) 死にたい、死にたい！殺して下さい！

ネフリウドフ (倒れ、マスロワをぢつと見おろし、靜にその側によつて扶け起す。マスロワ又酒の瓶を取つてベンチに腰をかけ飲みんとするのを、ネフリウドフ後から肩に手をかけ) お前の體が汚れてゐようがぬまいが、そんな事は私に取つちや何でもない。私がお前と結婚しようといふのはその體の中に眠つてゐる、お前の靈魂を呼び覺ましたいからだ。お前の靈魂を今一度昔の清いカチューシャにして、そのカチューシャと結婚したいのだ。お前をシベリヤから救ふだけが救ひぢ

やない。私のこの心持をよく呑み込んで呉れ。私はもう、世間並の結婚はなしなども斷つて、堅い決心で来たのだから、かはいさうだと思つて私の願ひを聞いて呉れ。分つたか？

(マスロワ、次第に顔あげ前を見つめる)

私は必ずお前を救はなくちや置かないよ。(マスロワうつとりとなつて、瓶を取り落し立ち上る。看守入口から顔を出し) 看守、公爵、どうしたのですか？もう時間が切れましたよ。

ネフリウドフ (カチューシャを見つめて) また来るよ、カチューシャ。(看守のある方へ出て行く。)

(マスロワは失神したやうになつて正面を見つめたまゝ、彫像の如く立つてゐる)

第四幕

監獄内の病院の一室、白い壁、正面中央に窓、其左右には薬品棚など、横兩方に入

口、室の中程、稍上手より大きな木地の角テーブル、其の上に薬瓶、乳鉢など置いてある。テーブルの周圍に二三脚の椅子。マスロワとフヨードシア、椅子に腰をかけて丸薬を採み居る。

フヨードシア でもよく酒も煙草も一どきに止されたわね。

マスロワ もとから好きで呑み出した譯でないからだらうさ。

フヨードシア だつて、あんなにうまさうに呑んでたものを急に斷つて了ふつてのは、大抵のことぢやないと思ふわ。あの方の眞實が通じたのぢやね。全くあの方は親切なお方ね。私までお蔭でこんな樂が出来て、私これなら、斯うして姉さんと二人であられるのなら、三年や四年の懲役ぐらゐ何でもないと思ふわ。こんど公爵さまがいらしたら、お禮を言はせて頂戴な？

マスロワ あゝ、お禮をお言ひ。本當にあの女囚室からこゝへ來ると清々することね。藥の香ひだけでも胸がすくやうだし、こんなにはまいた白い前掛をかけて……私、前掛をかけるのはほんとに久しぶりよ、十年ぶりよ。こんな

さつぱりした風をしてゐると、何だか昔のカチューシヤに戻つたやうで、うれしくてたまらないのよ。

フヨードシア えゝ、昔の姉さんに戻つてお了ひなさいよ。私お話を聞いただけでも、其の頃の姉さんが懐かしいわ。

マスロワ 私だつて、あの頃が懐かしいけれど……、私だけ昔に戻つても、傍がさうでなければつまらないわね。

フヨードシア ネフリニドフ様だつて、さうに違ひないのよ。姉さんを、昔の清い姉さんに引き戻さうと一生懸命骨折つていらつしやるのよ。姉さんはほんとに任せですわ。

マスロワ だけど考へて見ると、その間の十年は長いわねえ！ 變つたわねえ！ これでまた舊の私に戻れるものかしら！ 世間がさうさせて呉れるかしら？

フヨードシア それは姉さんの心がけ一つよ……ねえ、姉さんはいつか、あの方と別れた時の話をしましたつねね？ なぜあんな親切な方が、もう一度その別荘へいらつしやらんかつたのでせう？

マスロワ それはね、戦地からの歸りで、寄る暇が無かつたといふのよ。それで私は、夜わ

ざわざ停車場まで逢ひに行つたつけが……

フヨードシア さう？ で、逢へて？

マスロワ 私だけ一日見たけれど、それなり別れて了つたのさ。あゝ、あの時ほど悲しい、情ない思ひをしたことはなかつたつけ。あの時私は、ふつつりと、世の中が頼みにならないものだと思ひ切つたのだよ。

フヨードシア どうしてさ？

マスロワ 其のころは私ね、まだ何も知らないものだから、お腹の子どもの事を思ひ出しては、嬉しいやうな心配なやうな氣持で、毎日毎日、あの人を歸つて來るのを待つてゐたのよ。叔母さんたちも歸りには是非寄るやうにと手紙を出して、待ち暮してゐると、こんどは、規則で中途に寄り道することは出来ないと電報を打つて來たのさ。

フヨードシア まあ！

マスロワ だから私、是非會つて置かなくちやならないと思つてね、汽車の着くのは夜の二時だといふから、みんな疲たあとで、料理番の娘を連れて、肩掛を頭からすつぽり被つて、停車場へ駆けつけたのよ。

フヨードシア 大抵の事ぢやないわね。

マスロワ 其の晩は生ぬるい風が吹いて、大雨

が降つた後の闇夜でね、近路をしようと思つたのが、すつかり迷つてしまつて、停車場へ着いた時はもう發車の二番目の鈴が鳴つてるぢやないか？ だものだから、私、あわててプラットホームに駆け込んで、一等室の前まで行くと、中にはランプや蠟燭が目ばゆいやうにともつてゐて、二人の士官は天啓滅の椅子に倚りかゝつてトラムプをしてゐるし、あの人はきちんとした装で、椅子に肘をもたせて笑ひながら巻煙草を吹かしてゐたの。

フヨードシア で、向うでも姉さんに気がついたの？

マスロワ いゝえ、私、其の平氣な顔を見ると腹が立つやうな、懐かしいやうな、何ともいへない氣持になつて、いきなり拳で窓を叩く拍子に、列車はがたつと揺れて動きはじめたのよ。で、はじめは、せめて一言でも思つて、其の箱と並んで走つてゐると、内から其の様子を見た一人の士官が、硝子戸を明けようとして、しきりとがた／＼させたの。するとあの人も窓の側へやつて来て、二人でがたがたやつてる内に汽車は段々早くなり出してやつと窓の明いたときは、もう間に合はなかつたのだよ。…(涙ぐんでうつとりとなる)

フヨードシア それから？ それから？

マスロワ 私がまだ一生懸命に追つかけてるものだから、驛の役人がやつて来て、引き戻してつたのよ。私は雨で濡れてるプラットホームから危く滑り落ちようとしたのを、やつとの事でこんどは線路へ降りて追つかけたけれど、どうすることも出来よう筈はないし、水槽の所まで来たときは、肩掛は風に吹き飛ばされて、裾は泥と水でべた／＼になつてゐた。それを、あとからいさせき追つて来た娘が聲をかけたものだから、私は初めて氣がついて、べつたりそこに坐つたなり、泣き出しちやつたのよ。

フヨードシア 私も泣きたくなつたわ。

マスロワ づぶ濡れになつた娘も縋りついて泣くし、二人暗い中で、あの時こそしみ／＼泣いたよ。あの人はあんな氣象な眞似をしてゐて、私はこゝで斯うして土の上になつてゐると思ふと、なぜだかふつと生きてるのがいやになつて、このまゝ汽車に轢かれて死にたいと思つたよ。けれど、その横にせがまれて夢のやうに家へ歸つて来た。

フヨードシア でも、よかつたわね。

マスロワ あくる朝まで考へて、お腹の子ども

がかはいさうだと思ふと、また氣が折れて了つて、今日まで斯うして生きて来たのよ…

だけど、その時から私は、一つりと、神さまも人間も頼みにしない氣になつたのよ…

フヨードシア もう其の話はやめませうね、また十年前に戻れるのだから…

マスロワ 考へて見れば、あの方が悪いのでもないわね。それに今ぢや、あんなにして下さるものを、こなたは私ほんとに濟まない事をしたよ、こんど逢つたらお詫をして置かう。

フヨードシア 私また、姉さんへ教はつた歌を歌つてあげませうか？

(ネフリニドフ、小使に伴はれて入り来る)

マスロワ (られしげに走り寄り、手を出して握手) よくいらして下さつたのね。丁度今も喉をしてゐたのですよ。フヨードシアが一度お目にかゝつてお禮が申したいのですつて。

フヨードシア あなたが公儀でいらつしやるのですか？ (ネフリニドフの前に膝をついて)

私、お禮の申しやうもございませんわ。ほんとにほんとにありがたうございます。どうぞいつまでも、姉さんのお傍にゐられるやう

になすつて下さいまし。

ネフリユドフ (フヨードシアを立たして) よしよし、そんなに醜なんかいふ程の事ぢやないよ。つまりあなたの心がけがいゝから、病院でも許して呉れたのさ。

フヨードシア いゝえ、みんな公爵さまのお蔭でございませう。ぢや、姉さん、私ちよつと看護婦部屋へ行つて来ますわ。

マスロワ さう？
フヨードシア 公爵さま、御免遊ばせ。

(禮をして出て行く、ネフリユドフ、うなづく)

ネフリユドフ 今日ね、控訴の結果が分る筈で、こゝで辯護士のフナーリン君を待ち合はす事になつてゐるが、お前もこゝへ移つてから、もう可なり日數が立つたから、大分馴れて来たらうね？

マスロワ え、馴れて来ました。實は早くお口にかゝりたいと思つて待つてゐました。

ネフリユドフ 何か用が出来たのか？
マスロワ 用事つてほどのことでもないのです、ほんたうに何つて見たいと思ふことがあつたのですよ。

ネフリユドフ ふむ、何だらう？

マスロワ ほんたうに何つて見たいと思つたのはね、…何だか時々自分で獨り極めにそんな事を思ふものですか…まあよしませう。また此の次にうかゞひませう。それよりか、あなたは、あれからずつと田舎へ行つたらつしやいましたつてね？

ネフリユドフ あゝ、私はね、今度の跡しまつの爲に久しぶりであの別荘へ行つたよ。そして其のついでにお前の伯母さんといふのに逢つて、子供の墓も尋ねて来たよ。

マスロワ よくお墓が分りましたねえ。伯母さんはまだ達者でゐましたか？ 私も行つて見たいわねえ。どんなになつてでせうねえ！

ネフリユドフ 別荘にはもうチホン爺も居ないでね、中學生上りの若い男が留守番になつてゐて、建物は恐ろしく荒れてるし、屋根の鐵板の剥げたなりになつてゐる所などもあるし、煉瓦塀の上には草が一杯生えてゐた。それから裏庭つゞきの林檎や櫻の林はね、ちやうどこぼれるやうな花盛りで、あの垣根の接骨木の花も昔のやうに香つてゐたよ。

マスロワ あゝ、私、もう一度自由な身になつて行つて見たい！(うつとりとなる)

ネフリユドフ それからあの、水の裂ける音の

した川では、パチャ／＼と洗濯をする音が聞えてね、あの窓に顔突き出してゐると、和やかな風が吹いて来て、しんとした中に蜂のうなり聲が聞えてゐたよ。

マスロワ もう雪は無かつたのでせうね。

ネフリユドフ 無論さ。そしてね、私はやつとの事でお前の伯母さんの家を探ねあてて、逢つて見たよ。お前の事をよく覚えてゐたよ。

マスロワ あゝ、昔の自由な身になりたい！
…そして本當にかなふ事なら…

ネフリユドフ 私は誓つてお前を自由な身にする。そしてお前の蘇つた心で私と一緒になつて呉れ。

マスロワ それがかなふ事でせうか？…
ネフリユドフ かなふとも。お前の心はさうして今一度清い昔に戻るのだ。

マスロワ さうでせうか？…けれどだめですよだめですよ。一ど汚れた體は誰れも信用して呉れないから。

ネフリユドフ (肩に手をかけ、やさしく) そんな事を考へちやいけない。カチューシヤ。(助手階入り來る)

助手 あなた、此の方が面會室で待つておられるさうです。(名刺をわたす)

ネフリエドフ あ、フナーリン君が来たのだ。ではちよつと會つて來ます。(マスロワと助手とに目禮して出て行く)

助手 (マスロワの方に寄つて行つて) お前さんの名はマスロワだつてね?

マスロワ ええ。マスロワ。

助手 何處で稼いでゐたの? 此の土地で?

マスロワ (むつとして) 何處だつていゝぢやありませんか?

助手 以前のお前さんの馴染が、お前さんごここから救ひ出さうと骨折つてるといふぢやないか? 本當かい?

マスロワ 早くいらつしやらないと、院長さんが見えますよ。

助手 大丈夫、今は誰れも來ないことになつてゐるよ。だが、私もそのお馴染さんになりた

いものだよ。一たいどんな人だい? 素的に身分の高い人だといふぢやないか?

マスロワ ええ、ええ、非常に身分の高い人よ。

助手 名は何といふのだい?

マスロワ うるさいぢやありませんか? (立つて窓の方へ行く)

助手 そんなにうるさがらなくつたつて、いゝだらう?

マスロワ よかありませんよ。早くあつちへ行つて頂戴。

助手 馬鹿にかたぎな事を言ふね。お前さんにも似合はないぢやないか? いくら監獄の中だつて、おもしろい事も出來ようぢやないか? 看護婦さんのお手つだひなら、少しやあ我々の方へもお愛想くらゐしても、損はないぜ。

(女の傍へ行つて腰を抱かうとする、それを振り放して)

マスロワ あんまり人を馬鹿におしなさんなよ。(又テーブルの方へ行き、腰をかけて丸薬を添む)

助手 (ついて來て横手から) 新米にしちや、味みやうがうまいね。その粒の切りかたがまづいや。さ、手つきを教へてあげよう。

マスロワ 分つてゐますよ。(脇で助手を突き飛ばす)

助手 (後から抱きすくめて) この性悪女め、そんなに人をじらすものぢやないよ。ちよつとでいゝから、まあ私のいふ事をお聞き。お聞きつたらね。今夜ね、あの小さい廊下の戸を叩いて置から、そのすぐつき當りが私の宿直部屋だよ。いゝかい? 分つたかい?

マスロワ (立ち上りすりぬけて) 知らないつてばねえ。私、聲を立ててよ。

助手 お前さん、お小づかひに困つてるやうだから、こなひだから是れを上げようと思つたのだよ。取つて置いて頂戴。(銀貨を振らせようとする)

マスロワ (それを烈しく床の上に投げつけて) 人を馬鹿におしでなよ。(助手が捉へんとする手を振りほぐし、退つかけられるのを逃げ廻る)

助手 いや、おれに脇鐵砲を撃れるつもりだな。見やがれ、どうして呉れるか?

マスロワ (また捉へられて) 放さないか? 放さないと蹴とばすよ! 畜生! 畜生!

(振りはずはずみに、テーブルの上の物を床に落す。騒音。その途端下口から)

院長、ネフリエドフとフナーリンとを件ひ入り來る)

院長 こら? 何をする? なんだ、その騒ぎは?

助手 (びつくりして) 先生、どうも聞りました。この室へはひるとすぐ此のぎまですから、實際あきれて了ひます。大抵様子で分つてゐませうが... どうも明らさまに申上げ

るのも極まりがわるいやうで、どうかお察しを願ひます。ちよつと油断して候しい事を言ふと、もうすぐこの通りの事をしかけるので、どうして、なか／＼の女です。

醫長 一たい君、何をしたのです？

助手 何つて、どうも驚きました。私が丸薬の揉みかたを説明してゐますと、此の女がだしぬけに私に接吻しようとするのです。

マスロワ まあ！ 大詭つき！ 諛です、諛です、諛です。

助手 諛なものですか？…こなひだから私につきまとはつてる様子が、何か私をだまして、便宜を得ようとしてもしてゐるらしいのです。

マスロワ (泣聲になつて) あんな卑怯な。自分でした事を私に塗りつけて、大詭つき！ 大詭つき！

醫長 黙んなさい！…そんなに騒いぢやいかに。それよりかそこらに落ちてゐるものを片づけなさい！

助手 本當に此の女には驚きました…

醫長 もういゝから、君もあつちへ行きたまへ。君の部屋へ歸つてゐるが、マスロワ、お前はもう此處を出るのだぞ！ (大きな眼鏡越しにけはしくマスロワを見る。そして入口に立

ちすくんでゐるネフリエドフを願ひて) からいふ種類の女は、どうも困りますね、公爵、ネフリエドフ 分りました、分りました。ではどうか暫くこのまゝになすつて下さい。

(醫長出て行く)

マスロワ (おづ／＼と寄つて来て) 御免なさい？ 私、あの騒ぎでびつくりして了つたのですよ。

ネフリエドフ (冷やかに) これが辯護士のフアナリーさんといつて、いろ／＼お世話になつてゐる方だ、

(マスロワ辭儀をする)

フアナリーン 今日はおもしろくない知らせを持つて來たのですよ。控訴は却下されて了りました。

マスロワ 私、そんな事ぢやないかと思つてゐました。今さらしやうがございませぬわね？

ネフリエドフ 併し、ほかにまだ方法があるから、失望しなくてもいゝ。こんどは直ぐ上訴して特赦を願ふことにするのだ。

フアナリーン 裁判の形式に手落ちがあるので、すから、取り消すことの出來る裁判です。氣を落さないで下さい。マスロワ (ネフリエドフに) 私、もうその事は

どうでもいゝと思ひますから、この上あんな御心配下さらないやうにね。どうせもう、斯うなつた私ですから。それよりか、私がお願ひがあるのですよ。私は今の騒ぎで、また舊の櫛房へ入れられるのでせうけれど、あれは決して私がしたのぢやありませんから、どうかそれだけはね、悪しからず思つて下さいな。

ネフリエドフ あゝ、もうそんな事を言ふ必要はないよ、お前が何をしよう、それはお前の自由さ。私はどんな事があつても、一旦きまつた以上、お前を救ふといふ決心は變らなから。

マスロワ あなたまでがそんな事をおつしやつちや、私の立つ瀬がありませんわ。ねえ、悪く思はないで下さいな。あの助手めが私を見くびつて…

ネフリエドフ もういゝ、もういゝ。フアナリーン どうも困つたものですね。

マスロワ 私、どうしたらいいでせう？ (兩手を顔にあてる)

ネフリエドフ (あはれみの眼で見、其の手をおろさせ) もうそんな事はいゝといふぢやないか？

フアナリーリン ではともかくも、此上訴書類に署名して下さい。

マスロワ どこへですか。私、手がふるへてゐて書けさうありませんわ。

(襟巻の端で涙を拭ひ、啜り泣きながら)

テーブルに倚りうつむいて名を書け。辯護士は其の箇處を指定してゐる)

ネフリエドフ 上訴の結果の分るまでには、手間取るだらうから、お前は多分この十日の護送隊に遣入つて、シベリヤへ行かなくちやな

るまい。併し特赦されれば、すぐ歸つて來られるし、私もお前の隊について行くから、病場々々では會へるだらう。一時の事だと思つて辛抱して呉れ。

マスロワ え、もう、私、その事はちつとも苦にしてゐませんから、どうか御心配下さい

らないやうにね。シベリヤへ行かうがこゝにゐるやうが、どうせ私に取つちや同じ事ですから。

ネフリエドフ 途中でいるものを考へて置いて呉れ、持つて行けるだけは買ひとゝのへるから。

マスロワ 何もいるものはありませんわ。

ネフリエドフ シベリヤで逢ふまでは、それま

でまた當分逢へないから、何か私に言つて置くことがあるなら……

マスロワ 何もございませぬ。

ネフリエドフ では是れで用が済んだから、私等は歸るよ。

フアナリーリン 公爵、私は一足お先へ失禮いたします。

ネフリエドフ いや、私も御一緒に行きませう。さやうなら。

マスロワ さやうなら。

(マスロワは離れて立つたまま二人に挨拶し、其の出て行く後姿を見送つて、

テーブルの前にぐたりとなり、淋しく頬杖をついて考へ込む。フョードシアが這入つて來る)

フョードシア (マスロワの傍へ行き覗き込んで) 檻房へ歸るのだつてね? 私よく知つて

ゐますわ。姉さんが悪いのぢやない、みんなあの助手の奴が悪いのです。あいつが不斷してゐた事を、なぜ姉さんは言つつけてやらなかつたの?

マスロワ もう何も言はないことにしたのさ。私たちの言ふ事を信じて呉れるものは、世間

に一人もありはしないのだから。

フョードシア でも、公爵だけは信じて下さるわ。

マスロワ だめなの。誰れも信じちや呉れないの。……それもその筈だわね、私たちのやうになつたものは、實際自分で自分を信じるこ

とさへ出來ないのだから。私ね、一ど、或るお祭の晩たつて、そんな身の上がつくづく

くいやになつて、同じ家に居たピアノ、弾きの

女に其の話をすると、其の女もひどく自分の身をはかなくて、二人一緒にそつと家を出

る相談を極めたのさ。そして支度をしてゐると、そこへ男どもが大淫かれて上つて來て、

パイオリンを弾く男は曲弾を始めるし禮服を着た大男と持武者の小男とは私とピアノ

弾きの女をつかまへて踊り出すし。たうとら夜どほし踊つたり唄つたりして、あくる日

からはまた元の通りさ。逃げ出す相談なんか何處かへ行つちやつた。何が何だか分つたものぢやないのよ。

フョードシア 公爵は何か用があつていらつしやつたの?

マスロワ 控訴がだめになつて、私はこの月の十日にシベリヤへ行くのだから。

フョードシア まあ! 何うしたのでせうね?

いよ／＼さうと極まつたら、私も姉さんと一緒に行きたいわ。

マ스로ワ そんな事が出来るかどうか分りやしないよ。私ね、お前さんにかたみが上げたいよ。(棚の隅から小函を取り出す) 私が是非シベリヤへ持つて行かうと思ふのは此の小函一つきり。この中にはそれ(蓋をあけて品物を取り出す)あの寫眞と、それから昔つかつてゐた小鏡と、それから此の指輪と……此の指輪もあの方に初めて授けられた時の記念よ。これをお前さんに上げるから取つて置いてやうだい。

フヨードシア まあ、どうもありがたう。

マ스로ワ それから此の赤い花のリボン！これを差して、あの晩教會へ行つたつ。こんな風にさしたかしら。(鏡に向ひ昔のやうな身づくろひをして見る) こゝいらが襟飾りで一杯になつてゐて……(鏡の中の姿をしばらく見つめてゐて、がっかりしたやうに鏡を投げ出し) あゝ、もう、昔のカチューシヤぢやなくなつた！

フヨードシア 私、こんどこそ、あの歌を歌つてあげるわ。(低い聲で)

カチューシヤかはいや

別れのつらさ

せめて淡雪とけぬ間と

神にねがひをかけましょか

マ스로ワ (フヨードシアと同音に)

カチューシヤかはいや

別れのつらさ

せめて淡雪とけぬ間と

神にねがひをかけましょか

(此の歌をくり返すあひだに暮がおりる)

第五幕

シベリヤ一寒村にある驛所の構内。奥は見わたす限り一面の雪の原で、谷の兩側に村のつどいてゐる遠見。雪のつもつた並樹の向うが道になつて其の道を上手から下手へ、下手から前面へと出て來られる。下手に小屋あり、戸を明け放してある。其の軒下に腰かけ、數個のラムプなど。また上手には岩に寄せてテントが張つてある。時刻は夕ぐれで、遙かの空には入口の巖が赤く雪に反射してゐる。

奥の道からマ스로ワ等一隊の囚徒が護送の

兵數人に導かれて出て來る。普通囚人はマントを着、國事犯は學生服である。村の男が、食料品など賣りに來る。囚徒は護送兵の指揮で小屋やテントの中に這入り、焚火などはじめる。

女商人 (他の二三人と下手奥から籃など提げて出て來る) また一人も着ないね。この宿へは二三十人も來るかしら……

男商人一 こんどは全體で七百八人の囚徒だといふぜ。今にシベリヤは罪人で一杯になるだらうよ。

男商人二 今夜は少しはいゝ商賣があるかなあ。

女商人 今夜は復活祭だから、囚人たつて少しは御馳走をすのだらうよ。(上手奥を見) さあ、着いた……

男商人一 十四人は居るやうだ。(みな／＼道の方へ出て見る。警護兵を先に立てた囚人の一隊、並樹の向うを通つて出て來る)

女商人乙 さあ／＼、魚はいかいですか？ 善い魚ですよ。安くして置きますよ。五錢に負けてきますよ。

女商人甲 卵はいりませんか？ 卵はいりませんか？ 卵はいいりませんか？

新しい卵ですよ、産みたての卵ですよ。

男商人 肉菓子に焼豚、素麺に羊の肝、おいしいものばかりでございます。おいしくて安いものばかりでございます。

（四人等、がや／＼と寄り来り、商人等と話す）

護送の士官 こら／＼。こゝへ来ちやいかん。あつちへ行つて居れ、あつちへ行つて居れ。それから囚徒はそのテントと小屋に分れて、いつものやうに夕飯の支度をするのだ。

（病人を助けながら）（病人を助けながらして、みな／＼小屋とテントの中へ還入つたり、戸外に腰をおろしたりする。小屋とテントの中には火が焚え上る。士官兵士とも去る）

老男囚（テントの方で）おれはもう駄目だ！二十時間もあるきつづけたからもう駄目だ。老女囚 まあ四五時間はこゝで休めるんだから、ゆつくり寝て休むがいよ、お爺さん。

若女囚（獨語のやうに）風婆さん！お前さんも此の間に虱でも取つてお呉れよ。私たちが助かるから。

マリア さあ／＼、皆さん、静になすつて下さい。

さいよ。（小屋の方へ行つて病囚に）あなた寒かありませんか？蒲團にしつかりとくるまつておいでなさいよ。今夜は復活祭ですね？

病囚（屋内で）みなさんが御親切にして下さつて、實にありがたいです。今夜は復活祭ですね。は、世間は復活祭でも、私は死んで行くのです。（咳をする）

若女囚 あの人、事によつたら今夜が持てないかも知れない。

老男囚 かはいさうだな。一男囚（奥の方で）此の柱にナイフで字が彫つてあるよ。えゝと、「余は千八百八十年八月十七日刑事犯の一行と共に此の所を通過せり。囚事犯人は余一人なり。一人の友人はカザンの瘋癲病院にて自殺せり。余は主義のために倒るゝものなり」

マリア 名が書いてありますか？一男囚 ベルキンとしてあります。

マリア あゝ、其の人の事なら聞いたことがありませんよ。

病囚 私なんか、これくらゐの病氣でぐづ／＼言つちやならないですね。（小屋でマスロワ あゝ、やつと寝かしつけた。）

言ひながら舞臺の中程へ出て来る）

マリア マスロワさん、どうしたのですか？マスロワ あの子の父親はもうやつほどの年ですのよ。母親がチブスで死んでから、こゝへ来るまで十日間といふものの子を抱きとほして来たのですつて。それをね、意地のわるい護送兵が急に手錠をはめるといつたものだから、子供が抱けないと言つたら、口返答をしたといつて、頬つべたを血の出るまで撲つたのです。そして泣きたてる子供をむりやり引つたくるのですよ。私、あんまりかはいさうだつたから、すかして引きとつてやりました。

シモンソン（奥手から出て来る）子供は静まりましたね？

マスロワ えゝ、やつと静まりました。私の頬つべたを吸つて眠つて了りましたよ。

シモンソン さあ、みんなもう、大抵にして中へ還入つたら何うだね？食事の支度をした方がいゝだらうよ。

（マスロワ、マリア、シモンソンの外皆去る）

マリア マスロワさん、私はあなたにあやまらなくちやなりませんよ。實はね、あなたが斯

うして特別に我々國事犯囚の方へ御一緒に
なんなすつたのが不平でしたのよ。私たちは
無論平等主義ですけれど、何だかあなたと御
一緒といふ事が私たちの汚れのやうな気がし
て、あんまり打ち解けられなかつたのですよ。
それがこのごろから段々、あなたの御經歷に
似ず清い立派なお心だと知れて来て、私、
實は恥ぢ入つておりました。シモンソンさんが
初めからあなたを大事になすつたのが本當だ
と気がつきました。ですからね、どうか是れ
からは何もかも打ち明けて、お互ひに扶け合
つて、このかはいさうな囚徒のために盡して
やりませうね。私の了見の狭かつたのを勘辨
して頂戴な。

マスロワ マリアさん、何をおつしやるかと思
つたら、そんなつまらない事を勘辨も何もあ
りはしませんわ。私こそ、こちらへ一緒に
なつてから、まるで別の世界へでも来たやう
で、今まで十年ちつとも知らなかつた貴い
仕事をしてゐる気がしますの。これなら私、
なまじつかあちらにゐるよりも、罪人になつ
てこゝへ流された方がよほどありがたかつ
たと思ひます。みなさんの方が世間の人より
もすつと立派な方ですわ。ですから、どうか

此のさきもみんな御一緒に、いろ／＼の事を
教へて頂きたいのですよ。

シモンソン もう四年たつと自由になりますか
ら、それまで辛抱して下さい。自由になつた
ら、一緒にうんと立派な事をして、あれ等の
ために盡してやりませう。我々がこれまで嘗
めて来た辛苦艱難の結果を、生かして世の中
へ應用してやらなくちやいけません。あなた
のその美しい顔にも、随分長い辛苦の痕が見
えておます。今まではつらかつたでせうが、
こゝまで来れば、此のさきもう落ちつこはあ
りません。こゝで新しい生涯が開けるので
す。さう思ふと私は愉快でたまりません。

マスロワ 私も此のごろ何だかそんな風に思は
れて来ました。

シモンソン でね、私は……

(この時背後の道を通つてネフリユドフ、
一人の士官に伴はれ急ぎ足に遡入つて
来る)

マスロワ (振りかへり見て、ネフリユドフと顔
を見合はせ) あ! ネフリユドフさまが……
(シモンソンの後へ隠れるやうにする)

シモンソン さあ、また二人で病人の着物を乾
かしてやらう。いらつしやい。

(シモンソン、マスロワ、小屋の中へ這入
る)

マリア 公爵、しばらくお目にかゝりません。
私もう國へ御歸り遊ばしたかと思つてしまし
た。

ネフリユドフ いや、トムスクで國からの通信
を待つてゐたものですから、四五日遅れまし
た。別に變つた事ありませんでしたか?

マリア はい、變つた事もございません。あの
シモンソンさんが、しきりと公爵にお目にか
かりたいといつてゐました。

ネフリユドフ シモンソン君が? 何でせう?

マリア マスロワさんに關した事ぢやございま
せんか? シモンソンさんは、初めからあの
方を親身のやうにして大事にしてあげてゐま
すし、いろ／＼また考へもあるのをごさいま
せう。

ネフリユドフ シモンソン君といふのは、實際
立派な人物ですね。

マリア はあ。あゝして、一度思ひ立つた事は
實行しなくちや置かないといふ人ですから、
どうしてもこんな事になります。御承知でも
ございませうが、菜食論者だものですから、
着物まで一切動物の毛や皮は用ひないで、護

護製のものばかり着てゐます。あの人だけに
は、刑事犯人までが懐いてゐます。それにマ
スロワさんも實に立派な心掛けの婦人になら
れましたよ。公爵のお骨折はむだぢやござい
ませんでした。

士官 さあ、もういゝから引つ込みなさい。(マ
リアを去らせる)公爵、乾いてゐてお寒うご
ざいますな。火がございますか。(ネフリユ
ドフ谷煙草を興へる)いや、御馳走さま。あ
の、閣下がお世話をしていらつしやいます、
マスロワといふ婦人は、全く感心な婦人でご
ざいますな。

ネフリユドフ (うるさいといふ風で) さうで
すかね? さうでせう。

士官 (腰の水筒を取り出し) コニヤツク酒が
少しばかりございますが、いかゞですか、公
爵? 寒さ凌ぎに一口召し上りませんか?
ネフリユドフ いりません。(逃げ廻るやうに
して) 私は酒を斷つてゐますから。

士官 ですか。ぢや私がちよつと失禮して。
(一口飲んでもとへ収める)併しこの邊鄙な
シベリヤで高貴のお方と御一緒になるといふ
のは、實に名譽ですな。いや、全くあのマス
ロワといふ女は……

ネフリユドフ さうです。どうか君、その
女に至急會ひたいのですかねえ。

士官 承知しました。どうぞこちらへいらつし
やい。(小屋の入口を覗くとマスロワとシモ
ンソンが火の傍で病人の外套を乾かしてゐ
る。ネフリユドフをそこへ招いて置いて、士
官は禮をして去る)

ネフリユドフ (不快げに入口に立留まり) カ
チューシャ、私はお前に用があつて來たのだ
が……

マスロワ (冷淡に) あら、さうですか?
(立たうとするのをシモンソンとどめて)
シモンソン それより先に、私が一つ公爵に
お話ししたい事があるから、ちよつと待つて下
さい。(外へ出て)公爵、私は是非あなたに
聞いて頂きたい事があるのですが、お差支あ
りませぬまいか?

ネフリユドフ いゝですとも、話して下さい。
シモンソン それはカチューシャの事ですがね、
あなたとカチューシャとの關係はよく承知
してゐますから、一應御相談をするのが義務
だと思ひまして……

ネフリユドフ はあ、それは何ひませう。
シモンソン その御相談と申しますのはね、私

とカチューシャとの關係を一應耳に入れて置
きたいと思ふのです。

ネフリユドフ (段々心配げに) とおつしやる
のは?

シモンソン 實は、私があれば結婚したいので
す。

ネフリユドフ (驚いてちつと見つめ) ふむ!
それはカチューシャも同意ですか?
シモンソン まだカチューシャの意志は聞いて
見ませんが、これから打ち明けて聞いて見よ
うと思ふのです。

ネフリユドフ (冷やかに) それなら、私の關
する事ではありますまい。カチューシャの心
一つでできる事です。

シモンソン それはさうですが、併し、あなた
の計しが無ければ當人だつて、自由な返事は
出来ませぬまい。

ネフリユドフ どうして?

シモンソン つまりあなたとの關係がはつき
りしない内は、どちらへ行くことも出来ない
のです。

ネフリユドフ 併しその問題はもうきまつてゐ
ます。私は私の義務と信ずる事を行つて、
カチューシャの負擔を軽くしてやれば済むの

で、そのためにあれの自由を束縛する必要は
ありません。

シモンソン それはさうでせうが、併し、あれ
は、あなたのお世話になることを望まないや
うです。これだけは間違ひなからうと思ひま
す。

ネフリユドフ 別に世話をするといふ譯ちやあ
りません。

シモンソン でせうが、カチューシャは、あな
たの折角の御好意も飽くまで受けない決心で
をります。

ネフリユドフ それなら、何も改めて御相談な
さる必要はないぢやありませんか？

シモンソン 所がカチューシャは、あれの思つ
てる通りにあなたもなつて頂きたいと望んで
ゐるのです。

ネフリユドフ といふのは、私が爲なくちやな
らないと信じてゐる事をやめて呉れといふの
ですか？ それなら無理といふものです。私
は私の義務としてするのですから、先方の
希望でやめるといふ譯には行きません。併し
君、お互にこんなつまらない話はもうやめ
ようぢやありませんか？
シモンソン いや、大事な事ですから、どうか

よく聞いて下さい。それでは、あなたは、カ
チューシャの一身に關しては、手を引き下
さるのですね？

ネフリユドフ それはカチューシャがいやだと
いふのならしかたありません。

シモンソン では、あれにさう言ひませう。
ネフリユドフ 私があれに話さなくちやならな
い事があるのです。

シモンソン 公爵、私は決してカチューシャ
の色に溺れて斯んな事をいふのではありませ
ん。誤解して下さいやうに。私はたゞ彼
れを苦勞した立派な婦人として愛するのです
から、どうかして、あれとこれから半世の苦
勞を分かちたいと思ふのです。あれの行くところ
は、何處へでもついて行つて、あれの重荷
を軽くしてやりたいと思ふのです。

ネフリユドフ カチューシャが君のやうな立派
な保護者を得たのはあれの幸福です。

シモンソン ではどうか、其の幸福のために、
私とあれとが一緒になることを御承認下さ
い。

ネフリユドフ 私は何と御挨拶していか分ら
ないが、とにかくカチューシャに来るやうに
言つて下さい。直接話して見たいと思ひま

すから。
シモンソン (うなづいて入口の所へ行き) カ
チューシャ！ カチューシャ！ (呼びながら中
へ這入る)

(マスロワ出て来る)

マスロワ (おづ／＼と出て来て、冷やかに) 何
か御用ですか？

ネフリユドフ (カチューシャの手を取つて) カ
チューシャ、今日はいろ／＼話したい事があ
るよ。だが何よりも是れが一番きさだ。(ポ
ケットから書類を取り出し) 今度いよ／＼お
前の上訴が聞き届けられたよ。今日この書
類がフアナリーン君から届いた。折う書いて
ある。「請願局長は皇帝陛下の思召によ
りカチューシャ・マスロワが受けたる徒刑二十
年の宣告を破棄し、シベリヤ附近の地方に於
いて一年間の流刑に處す」ね、これですま
り特赦と同じ事になるのだ。

マスロワ ちや、こゝまで來なくてもよかつた
のですかねえ！

ネフリユドフ たうとう私たちの望みが之れで
半分成就した譯だ。お前は特赦になつた。
マスロワ 私ひとり他へ行かなくちやならな
いのでせうか？

ネフリユドフ それはお前の自由だが、その前にお前に聞かなくちやならないことがある。私は今シモンソン君からお前の身の上について相談を受けたよ。

マスロワ（うつむいて）何んな相談？

ネフリユドフ シモンソン君がお前と一緒にいたいといふのだ。（言つて思ひに泣む、しばらく間を置いて）お前が承知さへすればいいのだから、それにはまつさきに私とお前との關係をはつきりさせて呉れといふのだ。

マスロワ あなたと私の關係といひますと？

ネフリユドフ 私はこれまでも言つた通り、お前の體を救つた上でお前と結婚しようと思つてゐた。そしてお前も一時はあんなにして怒つたが、併し段々私の心持を解して呉れて、二人の結婚といふことが全くの空想でもないやうに見えて來た。そこへシモンソン君が入つて來たのだから、お前は今私とシモンソン君と、二人に一人を擇ばなくちやならない地位に立つてゐる。つまり私と結婚して呉れるか呉れないかといふ問題を決めればいゝのだ。お前はどうかいふ氣でゐるか？ シモンソン君とも親しくしてゐるやうだから、どうか本當の決心を聞かして呉れ。

マスロワ（途方にくれた様子でしばらく黙つてゐて）私の決心でそれはもう、疾くに決まつてゐるぢやありませんか？

ネフリユドフ 何う決まつてゐるのだ。

マスロワ 私のやうなものが、今さら人の妻になれつこはありませぬ。私は一生獨りで暮します。

ネフリユドフ カチユーシヤ、それはお前の心得違ひだ。何でお前が人の妻になれないであらう。

マスロワ いゝえ、こんな體で結婚するのは、其の人の顔をつぶすやうなものです。愛してゐる人の顔をつぶしてすむものぢやありません。

ネフリユドフ ではお前はシモンソン君を愛してゐるか？

マスロワ ……はい、愛してゐます。

ネフリユドフ あゝ、やつぱりさうだつたか！

お前もシモンソン君を愛してゐたのか！…

それでは私をどう思つてゐて呉れるか？

私はお前に取つちや何ういふ立場にゐるのかい？

マスロワ あなたと御一緒になることも無論お断りいたします。

ネフリユドフ シモンソン君は、お前があれと結婚することを望んでゐると言つたよ。

マスロワ さうですか？（沈黙の後）さうです、さうです。本當は私、あの人と一緒にしたいのです。あなたには長くお世話になりましたけれど、どうぞ悪しからず思つて下さいまし。シモンソン君がそんなに言つて呉れま

すなら、私、あの人と結婚した方がいゝと思ひますから。

ネフリユドフ それはお前本當かい？ 本當に考へてした決心かい？ 無論シモンソン君も立派な人物だから、それと結婚するのはお前の幸福かも知れないが、私もこゝまでついて來たのだから、お前の最後の言葉が聞きたいよ。

マスロワ 私、シモンソンと一緒にになります。

どうぞそれを許して下さい。

（沈黙）

ネフリユドフ きつと決心したのか？

マスロワ はい。決心したのですから、ね、どうか堪忍して下さい。

ネフリユドフ ふむ、思ひもかけない事だつたね…：ぢや、どうも仕方はない、さうするがいゝ。私の長い務めはこゝでお仕舞ひになる

のだね？ あゝ、長い旅だった！ それでは私はもうこゝに用の無い身だから、今夜にもすぐ跡へ引き返さう。お前の幸福を祈つて置くよ。カチューシャ。

マスロワ どうも、済みません。

ネフリユドフ お前の將來はシモンソン君に頼むから、私の仕残した務めを果して貰ひたい。

マスロワ あの人と一緒に、あなたのお志を守つて行きます。

ネフリユドフ どうかさうして呉れ。では、これで永いお別れになるのだね？（両手を取る）

マスロワ えゝ、永いお別れに。

ネフリユドフ そしてこゝで、私の義務も、お前の愛も、一緒に終つて了つたのだ。さやうなら、カチューシャ。（両手を取つたまゝ、ちつと見る）

マスロワ（突然男の胸にすがり）あゝ！ 私、このまゝちや別れられませんが、このまゝちや別れられませんか。どうして私の愛がこのまゝ消えて了ひませう？ 私はまだあなたを愛してゐます、あなたを愛してゐます。愛してゐればこそあなたと結婚することをお断りした

のです。

ネフリユドフ カチューシャ！ カチューシャ！

マスロワ あなたが初めて監獄へいらつしやつた時は、たゞ譯もなく憎くて、殺して了ひたい程に思つたのですが、今ちやもう、そんな心は無くなつて、昔よりもつと大切なあなたになりました。酒も煙草も斷つて、あなたのおつじやるやうに、段々昔のカチューシャに戻りかけて来たのも、みんな其のためです。

ネフリユドフ カチューシャ！ カチューシャ！

マスロワ それで時々は、ひよつとかすると、あなたのお言葉通り夫婦になつて、楽しい日が送れるものかと、已惚れてゐたことがあります。それが、それは私の料見ちがひでした。一度汚れた身は、傍がそんな事をさせません。あの病院の事があつてから、私はふつと已惚れの夢なんか見ないことにしたのですよ。

ネフリユドフ あれは私が至らなかつたからだ、どうか許して呉れ。

マスロワ 前すの、許さないのといふお話しやございません。私に取つちや、それがみんな悟りの道になつたのですから、今ちや誰れも怨んぢやゐりませんの。

ネフリユドフ では、今でもお前は私を愛して呉れるか。

マスロワ 愛してゐます。深く／＼愛してゐます。ですから、私、どうしても此の體であなたと御一緒になることが出来ないので、私はどんなつらい思ひしても、あなたのお身に累ひをかけやならない。

ネフリユドフ 併しそれは私が承知の上だから、救はれた體に累ひも何もある譯はないぢやないか？

マスロワ いえ、いえ、いくらあなたは御承知でも、それをさせては私がすみません。これだけは何んな事があつても思ひ切らうと決心したので、どうぞ其のまゝにして置いて下さい。途々も、お目にかゝつて親しくすればするほど執着が残ると思つて、なるたけよそ／＼しくして来たのですよ。

ネフリユドフ お前の志は實にうれしいが、そんなにしてシモンソン君と結婚して、これから後幸福に暮せるだらうか？

マスロワ それはもう心配しないで下さい。あの人はあんな立派な人ですから、私の心はよく呑み込んでゐて、少しもそれを氣にかけませんし、私だつてこれから、眞心をつく

してあの人の仕事を助けて行きます。その内には自然と幸福な目が来るだらうと思ひますの。

ネフリユドフ では、是れでいよ／＼私の用は無くなるのだね？

マスロワ 随分長いあひだ御親切を受けましたわね。

ネフリユドフ お前とシモンソン君とは、やっぱり長くシベリヤに残るつもりかい。

マスロワ はあ、どうせ四五年はあなくちやならないのですから、出来るだけ長くシベリヤに居て、不幸な囚徒のために盡してやりたいと思ひます。あなたは？

ネフリユドフ 私も、一度モスクワへ歸つてから、またすぐ出直して北の方へ行き、そこで一生をあはれた人々のために捧げたいと思ふ。萬事の手筈はモスクワで定めよう。

マスロワ モスクワからこゝまで何のくらゐありませうね？

ネフリユドフ 三千里以上だらうよ。

マスロワ 随分遠く来ましたわね。

ネフリユドフ あゝ、世界の果までもついて来ようとして約束したが！

マスロワ それから今夜は復活祭でしたね？

あの時から十年のあひだに、随分變つた處で變つた復活祭をしますこと！

ネフリユドフ 十年のあひだにねえ！ そして今夜が私たち二人の永劫のお別れになるのだ。そして別れ／＼に新しい生涯に邁入るのだ……私はお前に記念として上げよう。同宿したイギリスの紳士が呉れたパイブルだがね、ゆうべ私が偶然明けて見たところにするしがつけてある。馬太傳の十八章だ。ちよつと読んで御覽。

マスロワ (書物を取つて燈火にすかして)「其のとき、多くの弟子はイエスに來つて曰く、天國に於いて最も大いなるものは誰れぞや？ イエス、幼子と呼び、彼等の中に置きて曰く、我まことに爾曹に告げん、爾曹心を改めて幼子の如くならずんば、天國に行くことを得ず、凡そ此の幼子の如く自ら謙下るものは、天國に於いて最も大いなるものなり」

ネフリユドフ さう！ ちや、これでお別れにしよう。もうすぐ十二時だ。さやうなら。(言ひながら、カチューシヤを抱き昔のやうに肩に接吻しようとするのを、カチューシヤ額で受ける、長い接吻)

(この時遠くの寺で復活祭の鐘の音が聞

える。ネフリユドフ 驚いたやうに「キリストは蘇りたまへり」と言つて離れる)

ネフリユドフ ちや御機嫌よう、カチューシヤ！ (言つてすた／＼と逃げるやうに並樹向うの道へ出る)

マスロワ (見送つて) さやうなら、あなたも御機嫌よう！ (ちよつと間を置いて鐘また鳴る。小屋及テントの中から「キリストは蘇りたまへり」といふ聲が幾つか聞える)

マスロワ (淋しくこちらへ向き直つて)「キリストは蘇りたまへり」(沈んで言ひながら次第に頭を垂れる。)(幕)



前人の説を信じないのは、猿が人間の心を疑ふやうなものだと言つた者がある。私と前人との間には猿と人ほどの差があると考へたと見える。それで常人は人間の組だと考へ居るのだらうか。

(「覺がきよ」)